

セマイラセテ一念ノ信心サダマルこは、二河譬でいへば、罪のふかきをうちすてるは、水火の二河をかへりみずにて、佛にまかせまひらするは、二尊のこゝろに信順する無疑無慮の一心なり。十人ハ十人ナガラ百人ハ百人ナガラミナ淨土ニ往生スルこは、往生禮讚にのたまへる、十即十生百即百生のここにて、眞實報土の往生なり。百に一二、千に五三の往生、千中無一、萬不一生の化身土往生の林下難思の事にはあらず、微妙難思議の報身報土の往生の事なり。時ヲモイハズトコロヲモキラハズ念佛マウスベシこは、法然上人の御示めしに、念佛の行はもごより行住坐臥時處諸縁ご嫌ぬ行にてさふらへば、たごひ身も黒なく口も黒なくこも、心を清くして忘すまうさせたまはんここは、かへすく神妙にさふらふご和語燈録にみへ

たり、和讃にては、男女貴賤コトく彌陀ノ名號稱スルニ、行住坐臥モエラバズ時處諸縁モサハリナシごある往生要集のこゝろこれなり。コレスナハチ佛恩報謝ノ念佛トマウスナリこは、正信偈の唯能常稱如來號應報大悲弘誓願の御こゝろなりけり。且いふ示珠指に、フカクタノムハ信樂ノ義タスケタマへは、信欲の義ごして、唯識の名目にてかきたるは少智菩提の防げなるべし。

第五通 信心獲得之章

信心獲得ストイフハ第十八ノ願ヲユ、ロウルナリコノ願ヲユ、ロウルトイフハ南無阿彌陀佛ノスガタヲユ、ロウルナリこは、今家安心の一途をのへたまへるなり、かるがゆへにむすびごめたまへるにこの義は、當流一途の所談なるものなり、他流の人にたひしてかくの

御文講話

如く沙汰あるべからざるころなり、よくくこゝろうべきものなりと示したまへり、他流さしたまへるは、自餘の淨土宗のころなり、その他流は、黒谷法然上人のひらきたまひたる淨土眞宗のむねにたがへり、高僧和讃にも智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗をひらきつゝ、選擇本願のへたまふごあり、御本書の化巻には、淨土眞宗は證道今さかんなり、これ空師の所爲なりとて南北の學徒いさごをるごあれば、淨土眞宗の本意は、元祖法然上人にひらけたりけれども、法然の選擇集にも、そのほかにも淨土宗ごばかりありて、聖道淨土といふ事は二門のわかれあきらかなれごも淨土眞宗といふ四字連續の宗名はあらはしたまはざるゆへに、吾祖親鸞聖人にて、其宗脈を相承したまへるに、大無量壽經眞實之教淨

御文講話

土眞宗ご御宗名を立たまへり、これによりて自餘の淨土眞宗の如くもろくの雜行をゆるす宗意にあらずして、明惠上人のいへるが如く、法然上人の一向專修念佛宗まじりなき、眞宗の眞たるころをつたへたまへる當流なるがゆへに、現生にての正定聚不退の位に住するも、黒谷上人の所談のまゝなり、かるがゆへに漢語灯録の眞本には、不退者此現身の利益也、但護不退之益を得のみに非、當大菩提の益を得べき也、以之案之に、今此等の諸佛名を説たまへる事者唯念佛往生を證するのみに非ず、聽聞の諸衆現當二益を得せ令が爲の故也と、これを漢文にてかゝせられてあり、又その次の御文は、此經を聞に依て、現に不退轉を得也と同じ、漢文の漢語燈錄なり、これが今家相承の現益にて、今章のこゝろ歸命する一念のころに

發願廻向のこゝろありて、正定聚不退のくらゐに住すること、これが當流一途の所談なれば、他流の人に沙汰するなどの御示めしなり。他流に沙汰せば誹謗して罪をつくるにいたらんご、用捨したまへるごころなり、其誹謗をするおもむきは、「寶永二乙酉三月十一日知恩院四十二世白譽至心記すこして、柳馬場二條芳野屋作十郎より賣ひろめさせる、漢語燈錄の奥書に、宗義にそむくご間ありごして、想に是背宗の徒、邪僻の情を遂んごして、無根の語を書くわへ偽はりたるまぎれ文句あるをけづりて、義山に訂させたる善本を開板したりごあり、むかしあつむるごきには、厭欣沙門了惠集録すごほねをりて、その宗旨の先徳のあつめおきたる物を切ぬきくして、改むるに宗意にそむく邪徒たる者の書くわへをこりすてたりごいふ

もの、「今の現生正定聚不退轉あたりの當流一途の所談たるごころなり、兎角淨土宗にては、私意にかなはざる事あれば、後人邪人の書加へなりごて、三河法藏寺の九卷傳に、親鸞聖人の御俗姓よりこまご長文句のあるを、前後の弟子達の御連名の間へ、のちにかき入たるものなり、兩隣の御弟子の間へずるけ、癩病のわりこみてすはりたるが如く、兩ごなりごそいやらしからめご、強會辨にかきたり、この強會がいふごころ、今の新板の漢語燈に背宗の徒無根の邪義を書入たるごいひしをならひたるものなり、わるき學風なり、かゝる邪智をたくみいだすは罪になりそふな事なり、それらをかねてあはれみてそしらしめ、罪をつくらしむるなごて、他流の人に對して、當流の一途たる法然上人の正統は沙汰するなご示めしたまひた

るものなり、漢語燈録のむかしの眞本は、嵯峨の二尊院の所藏にて
 われらその寫得に就て、此判断をするものなり、今世流布の漢燈の
 改板本にては、一卷の中にも、文字をかへ文言を加減したる所、
 二百所もあれば、全部の中にては、貳千有餘どころの添削なれば、
 こゝにはつくし難し、件の現生不退等の要義をけつりたるころを
 又寸珍に書あらはす因便もあるべし。信心獲得ハ十八願ヲコ、ロウ
 ルソノ願ヲコ、ロウルハ南無阿彌陀佛ヲコ、ロウル”ごしめしたま
 へば、安心決定鈔にあることばを、うつしての御勸化なり、決定鈔
 には、凡夫は他力の信心獲得すること難し、淨土の法門は、第十八
 願をよくくこゝろうるほかはなきなり、第十八の願をこゝろうる
 さいふは、名號をこゝろうるなりとあるに同じ、これが御文は安心

決定鈔より、金玉をほり出しての御教化さいふどころなり、上にて
 もかきたる如く、東派と西派と決定鈔の見こみのことなるころな
 り。然れども、佛體即往生の行ごし、領解も機にはごまらず、領
 解すれば佛體にかへることあかせる決定鈔は、いかにも西山の法門な
 れば、示珠指にきらひ、本願訣に評するも道理なり。けれども示珠
 指にも出したる帖外の一章には、佛の正覺の外には衆生の往生はな
 しごし、正覺同時の往生ご談じ、阿彌陀佛の衆生の願行を成就せし
 いはれを、三心ごも三信ごも信心ごもいふごし、領解も機にはごま
 ならず、等の全文をそのまゝかきつらねて、文明十三年十一月十四日
 ごしてあたへたまひしをおもへば、決定鈔の土砂を去て、金玉をほ
 り出したまへるごもいひ難し、土砂ごもに御依用の事かごもおもは

るなり、示珠指は彼新義に對して己ここを得ざるの御作文歟とし
 て、愚推かくの如くこあれども、それは愚推も賢考も判じがた
 けれども、新義の安心不正義ならば、しかも正義を教示ありてこそ
 中興も再興もいふべけれども、不正義に對してやむここを得ず
 不正義を書つらねて月日たゞしく染筆あるは、不了義に對して不了
 義を示めしたまひたるの道理まここにあるべくもなきここにぞおも
 はれける。然ればかの大智なる講者の安心決定鈔は、今家の正聖教
 なりと辨じたるも、一理なきにあらず、佛光寺の勸章に、古御書こ
 てつねに拜讀する文言中にも、決定鈔の法門にひこしき事あるなれ
 ば、古代の事は今一段かんがへて解しるべきものなり、これも御文
 を拜見するの一廉也。コノユヘニ南無ト歸命スル一念ノトコロニ發

願廻向ノコ、ロアルベシコレスナハチ彌陀如來ノ凡夫ニ廻向シマシ
 マスコ、ロナリコは、これが六字をこゝろうるといふものなり、歸
 命する一念は、南無の二字なり、發願廻向のこゝろあるは、阿彌陀
 佛の四字なり、四帖目の第十四通に、一流安心の體といふ事、南無
 阿彌陀佛の六字のすがたなりと知るべしとありて、南無といふは歸
 命なり、亦是發願廻向の義なりの六字釋をひきて、それを示めした
 まへるにいたりて、南無といふ二字は、すなはち歸命といふこゝろ
 なり、歸命といふは、衆生の阿彌陀佛後生たすけたまへたのみた
 てまつるこゝろなり。また發願廻向といふは、たのむこゝろの衆生
 を攝取してすくひたまふこゝろなり、これすなはちやがて、阿彌陀
 佛の四字のこゝろなり」とあるに同じければ、ならべ合せて拜見すべ

る現益にて、悪業消滅は轉悪なり、入正定聚は成善なり、信の巻の一念の下に、口稱をまたずして、十種の利益をうることを明したまへども、冥衆護持益も常行大悲益もつゞまるころは、轉悪成善の一盆におさまるがゆへに、今も一念歸命の下にて、轉悪成善の益意を示めしたまへるなり、その轉悪も佛のかたにてはこのころなく、願力不思議にて消滅したまひ、衆生の方にては煩惱そのまゝおきながら、斷ぜずして、涅槃をうる有難さ筆にはつくし難し。コノ義ハ當流一途ノ所談ナルモノナリ他流ノヒトニ對シテカクノゴトク沙汰アルベカラザル所ナリとは、上に明すが如し。

第六通

無上大利之章

一念ニ彌陀ヲタノミタテマツル行者ニハ無上大利ノ功德ヲアタヘタ

マフコ、ロヲ和讃ニ聖人ノイハクとは、この一通はながれども、たのむ行者に功德をあたふるの義のみにて、つらぬくのほかなき事を知らしめて、初めに標章したまへるなり、四帖目の第十四通に、一切衆生の往生の體は、南無阿彌陀佛と云ふことありて、一通の始終たゞ六字釋にてつらぬきたるを標章して、一流安心ノ體トイフ事ごあるに同じ。五濁惡世ノ有情ノ選擇本願信ズレバ不可稱不可說不可思議ノ功德ハ行者ノ身ニミテリとは、自釋と祖釋ならへ見せて、五帖の數通におしわたりて、彌陀タノメとすゝむる自釋は、選擇本願信ズルと示めたまへる祖釋のここなりと知らしめ、本願信ズルが彌陀ヲタノム事なる義にて、信心に二途なきを示めたまへるごころ、一通の始終にたのむ行者に、大利をあたふる、信ずる

御 文 講 話

行者に大利をあたふる、たのむ衆生を攝取す、信ずる衆生を攝取するこ、たのむ信ずるこ、信ずるこたのむならべあはせくして、見せしめ知らしめ、つゞまるこころは彌陀をたのむこいふ事は、本願たのむ決定心なる義を示めたまへる也、かるがゆへに自釋と祖釋の見へわかりよきやうに一字さげて、一念に彌陀をたのみたてまつる行者には、無上大利の功徳をあたへたまふこゝろを和讃に聖人のいはく「こなし、おかれたるなるべし、然るを本願たのむ彌陀をたのむこは、領解に意味のかはれるやうにおもひしものもありたるは今さらにも不正義なりし事こそおもひ知らるれ。コノ和讃ノコ、ロハ五濁悪世ノ衆生トイフハ一切我等女人悪人ノコトナリこは舊釋の經論には、衆生とあるを新譯の經論にはみな有情とあるゆへ

御 文 講 話

淨土讚高僧讚は舊譯の三藏の經論をのべたまへるゆへに、衆生くごばかりにて、十方諸有の衆生をも、十方衆生を方便しこも、十方衆生のためにこてこも、利益衆生はきはもなしこも、この土の衆生のみならずこも、衆生を佛道にいらしむるこも、衆生ひさしくこままりてこも、念佛の衆生をみそなはしこも、濁悪邪見の衆生にはこも、淨土をうたがふ衆生をばこも、衆生有礙のさごりにてこも、衆生を一子のごこくこも、衆生佛を憶すればこもある事、みな本願の文成就の文のまゝにて、次の高僧和讃にも、衆生の願樂こごんくこも、衆生虚誑の身口意をこも、末法五濁の衆生はこも、衆生引接のためにてこも、化土にむまる、衆生をばこも、極悪深重の衆生こも、衆生化度のためにこてこもありて、一帖の終には、五濁悪世

の衆生の、選擇本願信ずれば、不可稱不可說不可思議の、功德は行者の身にみりてあり、さて次の正像末和讃には、衆生といふ事は一度もなく有情く、こばかりありて、末法五濁の有情のこも、有情やうやく身小なりこも、有情の邪見熾盛にてこも、この世の一切有情のこも、利益有情はきはもなしこも、五濁悪世の有情のこも、未來の有情利せんこも、五濁の有情をあはれみてこも、念佛誹謗の有情はこも有情をよばふてのせたまふこも、修すべき有情のなきゆへにこも、有情利益はさらになしこも、罪福信ずる有情はこも、和國の有情をあはれみてこも、有情利益はおもふまじこもありて、淨高の二帖は、舊譯の衆生、正像の一帖は新譯の有情にて、正信偈には舊譯の天親、二門偈には新譯の世親を置たまへるが如し、御こ

ある事ならん、記事珠には舊譯にも有情といふ語ありて、善導大師の定善義に有情の語あれば、一切經の慧琳音義に有情は新譯の語こしたるは失檢なりこかきてあれども、定善義が譯經の書にもあらねば、經の音義を失檢なりこ、一口にもいひがたからん、淨土高僧の和讃二帖にはかぎりて、衆生く、こし、正像末法の和讃一帖にはかぎりて、有情く、こしたまへる事、若琳音にこもなひたまへるの御心ろならば、失檢の一言たちまち開祖にあたらんも知らず、大乘義章にもあるこいへれども、これも譯經の書にもあらず、又あるかなきかも老眼にては、細字にて見へかねる、われ七十五歳の老眼ゆへ、記事珠のよく見へる若眼力こそうらやましけれ。不可說不可思議ノ功德トイフコトハカズカギリモナキ大功德ノコトナリこは

五帖目 七百九十八
 山海里の二篇目の中巻の十九紙の左より、二十四紙の右までに華嚴經の阿僧祇品の百二十轉の數量をつらねて、百千の數を百千よせたる一拘梨の數より、その拘梨の數を拘梨よせたるを不變といひ、不變を不變は那由他なり、那由他を那由他は脾婆邏なりといふより、一百二十轉くり上ぐて、不可稱轉不可說轉不可思議轉まで經の全文をつらねて、不可思議兆載永劫の法藏菩薩の御修行も有難く、不可稱不可說不可思議の功德は、行者の身にみつる尊さもかきつけをきたれば、ひらきてみるべし。ユノ大功德ヲ一念ニ彌陀ヲタノミマウス我等衆生に廻向シマシマス故ニ過去未來現在三世ノ業障一時ニツミキエテは、御本書の信の巻に、善導の歸三寶の偈頌にある横超斷四流を釋して、斷と言は往相の一心を發起するが故に、生こ

して受へべき生なく、趣として更到へべき趣なし、已に六趣四生因亡じ果滅す、即頓に三有生死を斷絶す、故に斷言曰也と示めしたまへる一心發起のたちごころに、生死の因果亡滅の義を述させられたるなり。かるがゆへに造りおきたる過去現在の業障もいまだつくらざる未來の業障も一時にきゆるこのたまひたるもの也、みな信の巻をうつしたまひたるなり。正定聚ノクラ井マダ等正覺ノクラ井ナンドニサダマルモノナリとは、祖師聖人の末燈鈔に、大無量壽經には、攝取不捨の利益にさだまるを、正定聚となづく、無量壽如來會には、等正覺と、きたまへり、その名こそかはりたれども、正定聚等正覺はひとつこゝろひとつくらゐなりとあるにて知るべし、和讃にては念佛往生の願により、等正覺にいたるひと、すなはち彌勒におなじ

御 文 講 話

くてごも、眞實信心うるゆへに、すなはち定聚にいりぬれば、補處の彌勒におなじくてごも、正定聚に歸入して補處の彌勒の如くなりごもあるごころごあはせてみるべし。コノコ、ロチマタ和讃ニイハク彌陀ノ本願信ズベシ本願信ズルヒトハミナ攝取不捨ノ利益ユヘ等正覺ニイタルナリトイヘリ攝取不捨トイフハコレモ一念ニ彌陀ヲタノミタテマツル衆生ヲ光明ノチカニチサメトリテ信ズルコ、ロダニモカハラチバステタマハズトイフ心ロチリごは、いよく知るべし一念に彌陀をたのむごありて、信ずるごころかはらぬ事ごしたまへば、明信佛智の經文を、不思議の佛智をたのむべしごあるに同じご知るべし、信ずるごころのかはれるは、信不具足の若存若亡の不如實なり、信ずるごころのかはらぬは、如實修行相應の信者なり、念

御 文 講 話

佛の衆生をみそなはし攝取して捨ざるの御利益は、この人にあるごごなり。「コ、ロタニモカハラヌごあるは、記事珠は一を詮ごするごごにて、雲だにも、心をだにも、一だにたかははずはのるいごいふ、叢林集には信心だにもかはらぬものから、攝取はなほかはらずごみれば、苦勞もなくきこゆるなりごかけり、いづれもよくきこゆるなり、祖釋には信心のさだまるごまふすも、攝取のゆへご見てさふらふごあれば、信ずる心のかはらぬも攝取のちからすてたまはぬも、攝取のちからなりければ、「かはりもせず捨られもせぬなり、示珠指には彌陀をたのむ、一念の臨終まで通て往生する義なりごいふ、これも聖教量ありてうごかぬごごなり、他流の如きは、念佛攝取なれば、念ずるごきは攝取なり、念佛おこたれば、捨たまへるご云が如

五帖目 八百二
きにはあらず。コノホカニイロノ法門ドモアリトイヘドモタ
一念ニ彌陀ヲタノム衆生ハミナユトク報土ニ往生スベキユ
メクウタガフコ、ロアルベカラザルモノナリとは、法然上人の
枚起請に、三心四修ごまふすこのさふらふは、みな決定して、南
無阿彌陀佛にて往生するぞごおもふうちにこもりさふらふなりごあ
るに同じく、今家におゐても、往相還相廻向不廻向要門弘願等いろ
くの法門沙汰はありけれども、安心門には一念歸命只一たすけた
まへごおもふこゝろ一にてやすくほさけになるのみぞごおしゑまし
ますごころなり、法事讃に種々法門ごあるは、聖道一代教をさした
るなれば、今このごころのこゝろにはあらず、今は浄土の法門の中
にてのいろく法門の事也。

第七通 五障三從之章

夫女人ノ身ハ五障三從トテオトコニマサリテカ、ルフカキツミノア
ルナリとは、存覺上人の女人往生聞書の中に、百八煩惱の根源は五
障を以て因ごし、十二因縁の流轉は、三從を以て縁ごして、八萬の
聖教に嫌るゝものなりごあるに同じ、法華經の提婆品に女人の身に
五障ありて、五の障はなれば女身の轉じがたき事をあらはし、龍
樹菩薩の大論の九十九卷のごころに、一切女人の三從を明かして、
幼則は父母に從がひ、少則は夫に從がひ、老則は子に從がふ、屬す
るごころなければ悪名を受るごあり、これは儒教にもいふごころに
して、三從ごもいふなり、男にまさりて罪のふかきごころごもは、四
通目の中に諸佛のちからにてはかなはぬ時なるごころごも知れたり、

第一帖の十通目にも出たる事なれば、てらしあはせて見べし。ユヘニ一切ノ女人ヲバ十方ニマシマス諸佛モワガナカラニテハ女人ヲバホトケニナシタマフコトサラニナシゴハ、善導の觀念法門に一切の女人彌陀の名願力に因ずんば、千劫萬劫洹河沙等の劫にも、終に女身を轉ずることを得べからずと知るべしとあるこゝろにて、和讃にては彌陀の名願によらざれば、百千萬劫すぐれども、いつのさはりはなれねば、女身をいかで轉ずべきと示めたまへるごころなり、示珠指には十方の諸佛に、女人成佛の誓願なし、阿彌陀佛獨女人成佛の大願を發ましますといふ、記事珠にはわがちからにての詞、女人の自力にてはかなはぬといふやうにきこゆれども、左にはあらず、諸佛の御ちからにてはかなはぬといふ事なりとかきてあ

り、親切なる筆記なり。然れば拙老曇藏もすこしなる事なれども、一座の法談もせらるゝ小僧たちにいふ事あり、わけなしに諸佛をらち明ずとて談ずべからず、諸佛も彌陀の分身といふごきは、らちあかずとばかりもいひ難く、又彌陀三昧に依りて正覺の三世諸佛といふごきは、我等も同じ成佛なり、それでは彌陀によりて成佛するもの、らちあかぬくといふやうにもきこへてあし、あごさきをかんがへてかたるがよし、又法華坊主の口まねにならぬやうに辨別すべし。然れば、日蓮のいふ事も知りて居て、まねせぬがよし○日蓮録内の書三十七右云、日本國ノ一切寺塔ノ佛像等ハ、形ハ佛ニ似タレドモ、意ハ佛ニアラズ、佛變シテ魔トナリ、鬼トナリ、國主乃至萬民ヲワヅラハス是ナリ」同二十三右云、諸經ハ、佛得道墮

五帖目 八百六

地獄根源法華獨成佛ノ法ナリ」云、同三十七右云、法華前説ノ諸經ハ、皆是妄語ナリ」云、同三十一九左云、コ、ロアラン人々ハ、念佛阿彌陀經等ヲバ父母主君宿世ノ敵キヨリモ可忌者也」云、同二十左云、彌陀ノ念佛ハ、無間地獄ノ業也、彌陀念佛ノ小善ヲモテ、法華經ノ大善ヲ失ナリ、小善ノ念佛ハ大惡ノ五逆ニモ過タリ」云、同十六右云、法華經ヲ信ズル人ヲ、イカニモシテ惡道ヘヲトサント思ニカナハザレバ、漸クスカサンガタメニ相似タル華嚴經ヘヲトス、惡友ハ杜順智嚴法藏澄觀等は也、又般若經ヘスカシ墮ス、惡友ハ玄奘慈恩是也、又大日經ヘスカシ墮ス、惡友ハ善無畏金剛智不空弘法慈覺智證是也、又禪宗ヘスカシ墮ス、惡友ハ達磨慧可等也、又觀經ヘスカシ墮ス、惡友ハ善導法然是也」云、同五右云、建長

寺壽福寺極樂寺大佛殿長樂寺等ノ一切ノ念佛者禪僧等ガ、寺塔ヲバ急ギヤキハラヒテ、彼等ガ頸ヲ由井ガ濱ニテキラズバ、日本國必ズホロボベシ」云、同十五八右云、禪宗念佛宗等ノ法師原ガ頸ヲ切テ鎌倉ノ由比ガ濱ニステズンバ、國マサニ亡ズベシ」云、同三十四五右云、燒亡ノ事委ク承ハリテ候、悦ビ入テ候、國王ステニ燒ヌ、知ス日本國ノ果報ノ盡ルシルシナリ、是ヨリ後モ御覽アレ、日蓮ヲソシル眞言及諸宗ノ法師原ガ、日本中ヲ祈ラバイヨ、國亡ブベシ、結句責ノ重カラシ時、上一人ヨリ下萬民マデモト、リチワカツヤツコトナリ、ホソチクウタメシアルベシ、後生ハサテ置ヌ、今生ニ法華經ノ敵トナリシ人ヲバ、梵天帝釋日月罰シタマヒテ、皆人ニミコリサセタマヘト申ツゲテ候」云、同三十一十五云、八幡大菩薩ハ、正

五帖目 八百八

直ノ頂ニヤドリ給フ、別ノ栖ナシ、但日本國ニハ日蓮一人計コソ、世間出世正直ノ者ニテハ候ヘシ、一部數十卷に集録して、天下に呼はる、事吹びすし、録外の書にはこれにまされるおもしろき事もあれど、他章に出したる事もあれば、今は略しぬ、彌陀本願家より出たる日蓮破斥のいろはうた、邪正辨も念佛誹謗宗より、弘化二年己の四月に出したる新板物に信聽作と蓮黨の總がかりを、一名にて力を見せたる念佛唱題勝劣辨も、午睡の目さましにもなればよみておくがよし、それらにいふ法華獨成佛の口眞似して、諸佛をつぶして阿彌陀獨をいわぬやうにするがよし、諸佛の女人をすてたまへるも彌陀一人り諸佛にすぐれてたすけたまへるも、又師匠の彌陀を信ずるに弟子の諸佛のよろこびたまへるも、彌陀の大悲ふかければも、

諸佛の大悲ふかければも、彌陀一佛の悲願にすがる一心も、不了佛智も、不思議智も、明信諸佛無上智恵も、有難く法談して、一向一心の御宗意の教示すべし、かへすくも法華坊主の破口のまねはつゝしむべし。コレニヨリテナニト阿彌陀ホトケヲタノミマイラセテホトケニナルベキヅナレバナニノヤウモイラズタフダゴ、ロナク一向ニ阿彌陀佛バカリヲタノミマイラセテ後生タステマヘトオモフコ、ロヒトツニテヤスクホトケニナルベキナリとは、往生の正因には二も三もなきゆへに、たすけたまへとおもふころ一にて、なにのやうもいらぬぞこの御示めしなり、一とあるは信心のこごなりかるがゆへに下の第十五章には、タ、他力ノ大信心一にて眞實ノ極樂往生ヲトグベキモノナリとあるにて、二なき事を知りて、信心

御 文 講 話

いふがたすけたまへの心のここに、すなはち大悲の勅命に信順する心の事なりと知るべし。たすけたまへと、深くこゝろに疑なく信じての御ことばにあはせて領解すべし。おもふ心一とあるが信ずるこゝろ一ツのこゝろなり、祖師聖人じきくの御本書教巻には、誠哉攝取不捨眞言超世希有正法聞思して遲慮すること莫とあり、文類聚鈔にも、攝取不捨の眞理超捷易往の教勅聞思して、遲慮すること莫とあり、この聞思が聞信のこゝろなり、此義のつぶさにあるは、眞宗法要の第二十卷に合してある淨土見聞集の六十一紙の左以下に、聞トイフハキクトヨム、キクトイフハタ、ナチサリニ名號チキクニハアラズ、本願ノ生起本末チキ、テ疑心アルコトナシ、カルガユヘニ聞トイフトノタヘリ、キ、テウタガハザルテ、聞トイフ、タトヒ八

御 文 講 話

萬法藏十二部經チキクトモ、疑心アラバ聞ニアラズ、聞ヨリオコル信心、思ヨリオコル信心トイフハキ、テウタカハズ、タモチテウシナハザルチイフ、思トイフハ信ナリ、キクモ他力ヨリキ、オモヒサダムルモ願力ニヨリテサダマルアヒダ、トモニ自力ノハカラヒノチリバカリモヨリツカザルナリ、コレチ自然トイフ、自ハチノヅカラトイフ、然ハシカラシムトイフ、法爾法然トシテ、他力ノ御ハカラヒニヨリテ、往生サダマルチイフナリ、往生ノサダマルシルシニハ慶喜ノ心オコルナリ、慶喜心ノオコルシルシニハ、報恩謝徳ノオモヒアリとあるにて、思は信なるを知りて、たすけたまへとふかくこゝろに疑なく、信じての御示めにたがはぬをありがたくよろこぶべし。コノコ、ロノツユナリホドモウタガヒナケレバカナラズカ

御 文 講 話

ナラズ極樂へマイリテウツクシキホトケトハナルベキナリごは、思
 よりおこりたる信心なるを、このころのつゆちりほごもうたがひ
 なければご、示めしたまひたるものなり、うつくしきはいつくしき
 ごもよむ文字にて、自利々他圓滿巧莊嚴の嚴の字にあたれり。嚴き
 佛ご成んうれしさに身を莊て、寺參するご女人同行のよみたるもか
 なへり、若生者の往生淨土門なれごも、女人は不成佛ごもいはる
 へに、女人には成佛のごばをもつて、女人成佛ちかひたりご
 も、女人成佛ごいへる殊勝の願をおこしたまへる彌陀なりごもある
 がゆへに、今も成佛のごばをもちて、男にまさりてふかきつみの
 あるなれごも、極樂へまひりて佛ごは成べきなりご示めさせられた
 るものなり。ユノウヘニコ、ロウルベキヤウハトキく、念佛チマウ

御 文 講 話

シテごは、ねてもさめてもへだてなく、稱名念佛の相續なり。トキ
 く、マウスごは、太郎入道覺信のよろこびすでにちかつけりごて、
 臨終念佛の強盛なりしには、似も似よる事なく、平生にはおもひい
 づるにまかせて、時にふれ折にたよりて、稱名念佛するすがた、覺
 信房の信のうへの稱名も同じごなるこそ有難けれ。御一代聞書の
 中に、「往生決定の、ちなれば、懈怠おほくなるごこのあさましや、
 かゝる懈怠おほくなるものなれごも、御たすけは治定なり、ありが
 たや、ごよろこぶころを他力大行の催促なりごも、又憶念稱名
 いさみありてごは、稱名はいさみの念佛なり、信のうへはうれしく
 いさみてまふす念佛なりごもあるに同じ、同く聞書の六十一紙の右
 左に、津國郡家の主計さまふす人あり、ひまなく念佛まうす間、ひ

御 文 講 話

げをそるごき切ぬごこなし、わすれて念佛まうすなり、人はくちは
 たらかねば、念佛もすこしのあいだもまうされぬかごころもごな
 き由に候」ごあり、これは今郡家村妙圓寺の開基にて、西派なりし
 が、中古轉派して佛派の一寺なり、後世身柄の一山なれば、先祖
 名主計は足利持氏公の家臣、入道して圓隆に見ゆれども、今の文に
 コ、ロモトナキ由ごあれば、太郎入道の念佛強盛ごは意味のちがひ
 たるならん。クナハタラカチバ、念佛モスコシノアヒダモマウサレ
 ヌカ」ごあるは、同七十四紙の右左に、「丹後法眼蓮慈衣裳ト、ノヘ
 ラレ、前々住上人ノ御前ニ伺候サフラヒシ時、仰ラレ候、衣ノエリ
 ナ御タ、キアリテ、南無阿彌陀佛ヨト仰ラレ候」又前住上人ハ御タ
 、ミナタ、カレ、南無阿彌陀佛ニモタレタル由仰ラレ候キ、南無阿

御 文 講 話

彌陀佛ニ身ナバマルメタルト仰ラレ候ト符合申候」トアル義トハ、
 同ゼザルニヤ。阿彌陀如來ノ御恩ノ御ウレシサアリガタサヲ報ゼン
 タメニ念佛マウスベキバカリナリトコ、ロウベキモノ也アナカシコ
 〳〵ごは、御ダスケノアリガタサヨトヨロユブユ、ロアレバソノウ
 レシサニ念佛マウスバカリナリ、スナハチ佛恩報謝ナリごも、御タ
 スケニアヅカリタルコトノアリガタサヨ〳〵ト、コ、ロニ思ヒマイ
 ラスルナクナニイダシテ、南無阿彌陀佛〳〵トマウスチ佛恩ヲ報ズ
 ルトハマウスコトナリ」ごあるも、みな〳〵おなじ事なり。淨土見
 聞集に、きくも他力よりき、おもひさだむるも願力によりてさだ
 まる、往生のさだまるしるしには慶喜の心おこるなり、慶喜の心お
 こるしるしには、報恩謝德のおもひありごみへたるも、御一代聞書

に彌陀のかたよりたのむころも、たふさやありがたや念佛まうすころも、みなあたへたまふさある御ことばも、此ころにひきあはせてよろこぶへし。

第八通 五劫思惟之章

ソレ五劫思惟ノ本願トイフモ兆戴永劫ノ修行トイフモタゞ我等一切衆生ヲアナガチニタスケタマハンガタメノ方便ニ阿彌陀如來御辛勞アリテは、兆載劫の御修行を方便彌陀の辛勞さあることばの續きは、祖師の出入二門偈の不可思議兆載劫漸次成就五種門善巧方便諸衆生爲生安樂國意故の語をうつしたまひたるおもむきなり、方便の辛勞さいふは、正直を方ごし已を外にするを便さすさありて、我身は苦毒にこゝまるこも、衆生の爲の行なれば、忍て終に悔ざらんこ

大慈大悲の正直に御身の爲はほかにして、衆生をさきへたすけんこ阿彌陀佛のむかし法藏比丘たりしごき、衆生佛に成らずば我も正覺ならじこの御ちかひを、方便の御辛勞さいふなり。然れば方便さいふは、眞實の中の眞實さいふものにて、法華經八卷の中にて、序品譬喻品陀羅尼品安樂行品壽量品勸持品提婆品神力品普門品等、二十八品ある中にて、諸法實相十如是の眞實の眞實の極眞實の一品を、妙法蓮華經方便品さあるにて、方便は眞實のこごなりご知るべし、御本尊の裏書にも、方便法身の尊形さあるも、我等のために御辛勞くだされたる眞實の御かたちなり、法性法身より方便法身を出すさあらはされたる御裏なり、和讃にて、往相の廻向さくごごは、彌陀の方便ささいたり、無上の方便なりければ、諸佛淨土をす

めけり、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、自利々他圓満して、歸命方便巧莊嚴、明了堅固究竟願慈悲方便不思議なり、諸佛方便さきいたりも、他の方便さらになしも、みなく眞實なる法華方便品の如き眞如實相たる眞實のこごなり、此外に假の方便さふこごあり、それも虚なる事にはあらず、實のこごるまではゆきがたきを、いざないこしらへてみちびく事を方便さいふ事あり、こしらへるさいふは、つくる事にてはなし、眞のこごるへは宿善未熟にして、いたらぬものを假門より眞門にみちびき、眞門より眞如の門に轉入せしむるを、方便假門とも方便眞門ともいふなり、その機をいざなひみちびくをこしらへるさいふものなり、和讃にては、釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて、正雜二行方便さごある

如きはこしらへみちびく方便なり、十九の願の和讃には、「十九ノ願ノコ、口諸行往生ナリ、至心發願欲生ト十方衆生ヲ方便シ」ごあるが假の方便なり、又二十の願の和讃には、「二十ノ願ノコ、ロナリ、自力ノ念佛ヲ願シタマヘリ、至心廻向欲生ト十方衆生ヲ方便シ」ごあるが、假の方便ご云ものなり。聖道權假の方便に、衆生ひさしくごままりて、疑心の善人なるゆへに、方便化土にごまるなり、七寶講堂道場樹方便化身の淨土なりの類みな自力假門の方便なり、其外「彌陀釋迦方便して方便引入せしめけりも、釋迦韋提方便して淨土の機縁熟するも、みなこしらへみちびきたまへる事なり、然れば方便さへあれば、眞實にあらざるをいふごばかりおもひては、法門を害する事勿體なくおそろしき事なり、相傳もせざる聖教をわが身

の字ちからをもて、これをよみかたればしめぬるせ法門になるはづの事を合點すべし。南無阿彌陀佛トイフ本願ヲタマシクテといふは、記事珠に云、第十七の行の願の事こもみゆれども、今のこゝろは第十八願の事なり。雪窓は至心信樂は南無也、若不生者不取正覺は阿彌陀にならん願じたまふ意なりと註すれども、初の義を穩當とすべし。示珠指に云、南無阿彌陀佛といふ本願をたてましますとは、第十八願なり、因中に果を説がゆへに、他流の傳通記も引て至心信樂の願心は、南無の二字乃至十念は、即是阿彌陀佛影略互顯して知べしとあり。今寸珍にていへば、五劫思惟の本願と願を五劫の方とし、兆載劫の修行を行きて、五劫は願永劫は行きて、三帖目の第六通に南無といふは願なり、阿彌陀佛といふは行なりとあ

るこゝろにて、四十八ある設我得佛の佛の字は、みな南無阿彌陀佛になりたればの義なれば、四十八ながら南無阿彌陀佛に成んこの因願なり。然れば南無阿彌陀佛といふ本願をたてましくたる也、因中説果をいふにおよばず、四十八願攝受衆生も、四十八願酬報身も四十八願莊嚴起もみな設我得佛の佛の一ツ南無阿彌陀佛の因願力として、其因力の果力なる所願因願果増減なき所をすなはち今文に南無阿彌陀佛こなりましますと示めたまへり、御文面をよくく拜見すべし。南無ト歸命スレハ阿彌陀佛ノタスケタマヘルコトナリとあるより、以下の御すゝめは、御文相のまゝを讀みてよろこびたてまつるべし。眞實の淨土へ往生するごは、化土の往生をゑらびて、眞土にいたるこの御示めしなり、五劫永劫の辛勞にて、成就の

南無阿彌陀佛なれども、自力稱名のひこはみな、うたがふつみのふ
かきゆへ、方便化土にごまる也、佛智不思議を信ずれば、無上覺を
ぞさざりけるにて、うたがひなく信ぜんもがらは、眞實の彌陀の
淨土に往生するぞこの御文面、はじめをはりをてらし合せて拜見あ
るべし。

第九通 安心一義之章

當流ノ安心ノ一義トイフハタ、南無阿彌陀佛ノ六字ノコ、ロナリ
は、他章にては、一流安心ノ體トイフ事、南無阿彌陀佛ノ六字ノス
ガタナリトアリテ、信心トイフハコノ南無阿彌陀佛ノイハレナアラ
ハセルスガタ也トモ、南無阿彌陀佛ノ六字ヲコ、ロヘワケタルガ
ナハナ他方信心ノ體ナリトモ、南無阿彌陀佛ノ六ノ字ノコ、ロナク

ワシクシリタルガ、スナハナ他方信心ノスガタナリトモ、南無阿彌
陀佛ノ六字ノイハレヲヨクコ、ロヘワケタルヲモテ、信心決定ノ體
トストモ、信心決定ストイフ體ハ、スナハナ南無阿彌陀佛ノスガタ
トコ、ロウベキナリ」ごもありて、五帖一部に信心安心を示めした
まへる事この外に二途なし、かるがゆへにむすびごめには、一切ノ
聖教トイフモ、タ、南無阿彌陀佛ノ六字ヲ信ゼシメンガタメナリト
イフコ、ロナリトオモフベキモノナリ」ご示めしたまへり、一切の
聖教ごいふは、淨土正依の經論釋、ひろくいへば、記事珠に曰く、
光闡道教は一切の聖教なり、大經眞實の序分に、廣く菩薩の自利々
他の願行を説も、眞實之利の弄引たる事を示めす、觀經序分義の化
前序もこのこゝろなり、口傳鈔に月まつ手すさみの風情ごせりご。

示珠指も化前に約せば、一代の教門とす、慧空の叢林集には、一切の聖教はこの法を信ぜしむる佛神、かねては孔老の教日月の運行まで、西方願求の方便なるべしといへり。寸珍これにともなひておもふに神にていへば、孔熊野權現、兪城州八幡共に本地は彌陀なれども、證誠殿は不生の阿字、八幡宮は紇理俱字なり、祇園、赤山、叢熱田、玄諏訪いづれも同じ薬師なれども、種字の相傳はみな別なり、修法の印相も、祇園は内縛して二大指を立る、諏訪は虚合して二中指を開く等、みな隨縁の攝化はかり知るべきにあらず、鹿嶋の觀音、孔廣田の勢至、いづれか權化にあらざるはなく、星にていへば、九曜道場觀にては、字變じて羅睺星なる、字變じて土曜なる。字變じて水曜なる、字變じて金曜なる、孔

字變じて日曜なる、字變じて月曜なる、字變じて木曜なる、字變じて計都星なるが如きは、密教の所談なれども、書面に見るところみな佛教にあらざるはなく、火曜は惡星なれども種字は日曜に同じければ、彌陀觀音の普賢身なるべし、これかの慧空のいへりける西方願求の大方便、峯入山伏の先達して吉野なるかねの鳥居に手をかけて、彌陀の淨土へゆくそうれしきといはしむること人みなしりけるも、一乗も極唱終歸は威く樂邦を指の義ならんこと筆にはつくし難し。タトヘバ南無ト歸命スレバは、物にたごへていふ譬喩のここにはあらず、南無歸命のここはりを耳ちかく聞へやすくいはゞこ、合點のゆきやすき世間のここはづかいをもつて示めしたまへるならん。記事珠には、和俗の世語に任せて、俗語を用

ひたまふやうにおもふは、古雅の言ばにして據あることを考へざればなりとして、源氏物語の若菜の巻、胡蝶の巻、夕霧の巻、蜻蛉の巻、夢の浮橋藤袴等の巻々をひきいだしてくわしき事なり、只々御一言にても大切にうかゞはれたるものなり、湖月鈔にても引き合せて御教示をいただくべし。

第十通 聖人一流之章

●聖人●一●流●ノ●御●勸●化●ノ●チ●モ●ム●キ●ハ●信●心●ヲ●モ●テ●本●ト●セ●ラ●レ●候●は●、●今●家●眞●宗●の●開●山●は●、●黒●谷●吉●水●の●法●然●上●人●より●御●附●屬●の●選●擇●集●の●肝●要●た●る●第●八●段●、●念●佛●の●行●者●必●三●心●を●具●足●す●べ●し●と●あり●て●、●觀●經●に●三●心●を●具●する●者●は●、●彼●國●に●生●ず●る●と●ある●佛●說●より●、●至●は●眞●なり●、●誠●は●實●なり●と●ある●善●導●の●至●誠●心●の●眞●實●を●明●した●ま●へ●る●釋●文●、●次●の●深●心●に●つ

ゐては、深心といふは深く信ずるの心なりとあるより、機の深信法の深信、七深心六決定三佛隨順二河白道信心が、りの經釋はのこりなく引つらねて、其段の御私釋には、三心は是行者の至要なりとして、生死の家には疑を所以止と爲、涅槃の城には信を以能入と爲と引文は長く私釋は短く、行者能用心して敢て忽緒せしむること勿れとあり、其御私釋の短ところが、元久乙の丑の歳綽空善信たる吾祖親鸞聖人へ選擇集の御附屬の心魂なり、法然源空たる大師聖人の御ことばをこしてみれば、選擇集の十六章段はじめ教相二行の章より、第七念佛攝取章夫より第九の念佛四修章より、十六段の終なる彌陀の名號付屬章にいたるまでの、念佛爲本の念佛は、日本一州に開きたれば、念佛元祖の法功は事足り、此念佛に至心深心を具せしむる

は、綽空善信の身にある事なりと、念言もいふべき御付屬なるがゆへに、眞宗の簡要念佛の奥義斯に攝在せり、誠に是希有最勝の華文無上甚深の寶典也、年を涉り日を涉り其教誨を蒙の人千萬なりといへども、親しいひ疎しいひ、此見寫を獲の徒甚以かたし、爾に既に製作を書寫し眞影を圖畫す、是專念正業の徳也、是決定往生の徴なり、仍て悲喜の涙を抑て由來の縁を註す、顯化身土文類の六に遊ばされて、深く如來の矜哀を知り、良に師教の厚恩を仰く、慶喜彌至り至孝彌重しとあるより起りきたる、今家吾祖の信心爲本、これが今章の「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもて本とせられ候ごある本源なり。然るに鎮徒にて、學匠なりといひし洛の專念寺和尚自坊にて説法の標札あるに、其時刻に通行するごと、我等兩

三輩立ぎ、したりけるに、和尚高座を叩きて日課念佛の同行等、信心沙汰は無用にせよ信心もさきは無益なり、信心もさきのまねをしては、極樂往生はならぬぞ、くりかへし、その辨舌のさはやかなる事、談義にも名ある人ならんごみへたり、そのごはの信心もさまごいふごは、俗語にて信心なぶりといふ事か、信心沙汰ごいふごは、いづれ信心のこをいふを破するおもむきにきこへたり、信心沙汰がわるければ選擇集の三心章は、元祖の信心もさきに、彌陀の化現の善導の眞實信心ゑざるをば、一心かけぬごおしへたり、一心かけたる人はみな三信具せずごおもふべしのご、ろなるを、その眞似しても極樂往生はならぬぞ、ご高座をた、くは、圓光大師に對しての過言ならずや、打擧篇の寫本にてひそかに誹謗

御文講話

せしころはやさしくしほらしくもありたりしが、近世は今家の御宗
 意ますますなるを嫉妬ふかくなりけるにや、強會不可會の板本にて
 悪口雑言愚禿辨偽といふ物をも、版行してのねたみそしりのつたな
 き事、日蓮坊主の修羅談義にもまされり、尙又近頃版行せし一枚起
 請講説の上卷十七紙の左右には、一向宗に專選擇集を親鸞へ御附屬
 なごいへごも、勅修御傳四十八卷中にふつにあることなき虚言な
 り、又彼が所立は、選擇集とは悉く反轉せりさるに依て一流の點ご
 て、文を曲て點をつけたるものなり、反轉する所立なれば選擇集を
 用ひざれば、却て痛こさなければごも邪解してつけかへし點を大師よ
 り密に傳へ玉へる深義に依て、施やうにいひなすこと害中の大害、
 實に此邪謀に過たるはなしご、天保亥年長州法道自恣の日に書ごし

御文講話

てあり、いかにも自恣なる説なれば、自恣の日の筆なるべし、こ
 れにつきて今年今月おもしろくおかしき事あり、淨土眞宗教典志に
 いふが如く、法然上人御臨終の圖一軸、建曆二年壬申二月二日、鎮
 西沙門辨阿これを畫すごありて、現に黒谷の傳來にて、毎年六月廿
 五日、元祖影堂の左の方にかけて、むかしより諸人におがましむる
 事なり、元祖大師は頭北面西右脇に臥したまひて、如來涅槃の儀式
 の如く、御弟子の僧衆は百人ばかり、俗衆は五六人侍座せり、上に
 大樹ありて鳳凰一羽小鳥二羽その枝にさまりてあり、下には猿狐狗
 一疋づ、小蟲三畫てあり、一道の光明上人の御頭上にいたりてある
 瑞相あり、あつまりてある御弟子は、一人くは其名をしるして、
 聖覺隆寛信空源智辨阿等ご明かに銘じてあり、隆寛は手をもつて上

人の御首を按て、つめたくならせたまへるを試しらるゝのすがたなり、吾祖の綽空上人は隆寛律師へ並座してましますなり、その御名字の明かなる事いかにも鎮西の流祖聖光上人の筆跡にてあるべし、圖の下には同筆にて、其記文凡一百餘字あり、此一軸往古より虫干に出して掛ざる事なし。然るに今年嘉永改元の六月二十五日には、みないふ今日は御往生の時の一軸はかゝりてなしと、われはたおもふ子細ありて、義肇大乘禿樹等の輩をつかはして、黒谷の堂僧に問しむるに、堂僧のこたへに、今年は表具にやりてあるゆへに、かゝらぬなりといひける、年々定めし虫干の時にあたりて、表具にやりたりといふもおかしけれども、おもふ子細は、その事なほ近年嫉謗して開板流行せしむる彼徒の書類に、善心房は一念義の幸西の弟

子にて、元祖大師の直弟にはあらずと決評せり、然るに御臨終には東關のさかひにまませごも常隨たるべきの御身柄ゆへに、上足の御弟子に一系列同座の繪圖にならしめてあるはさすがに流祖辨阿上人の私くしなき眞跡なる物、今世の妄語にはさはりさなる事を知りて今年心づきてかくしたるなるべし、表具屋に命じて綽空の御名を削て改名ならしめて、來年の虫干には出すものか、又別に企つる巧智のふかきそこだくみなるも計り難し、讃岐佛生寺の親鸞御眞影も遠からずしてかくしうづますも知らず、鎮徒の心中、此せつは嚙狗の如くになりて、いるもありいらるゝもあり、ましますもあり、不便にも氣毒にも御うたてくもありけること、御冥見をこもなひて、その振舞を見てゐるのみ。信心爲本は、信の巻の事にて、涅槃眞因唯以

五帖目 八百三十四

信心の御一言を、その根元と拜見すべし。ソノユヘニモロモロノ雜行ヲナゲステ、一心ニ彌陀ニ歸命スレバは、普導散善義就立信のところに二種あり、一者正行二者雜行とありて、その正行に就て、正業助業を判じて、其結文に此正助二行を除て、已外自餘の諸善をば、悉く雜行と名づくこあるが、此もろくの雜行なり、化身土の卷の中に、凡淨土一切諸行に於て、綽和尚は萬行といひ、導和尚は雜行と稱す、感禪師は諸行といふ、信和尚は感師により、空聖人は導和尚によるなりとありて、雜行の中の雜行雜心雜行專心專行雜心等の御分別ある者これなり。ナゲステルは、抛の字にて、抛は抛擲棄相なりとありて、ナゲウチスツル事なり、今の抛棄のこごばこれなり、擲は振なりとありて、もろくの雜行雜修自力なんご

いふわろき心を振捨てこある、これなり。振は止なりとありて、もろくの雜行のこゝろを止て、一心に阿彌陀如來に歸命してこあるこれなり、捨は弛也弛は弛廢なりにて、雜行雜善に心をかけず、雜行雜修をさしをきての御こごば、みな同じこゝろにて、そのもごづくこごころは、選擇集の二行章に、善導和尚正雜二行を立て、雜行を捨て正行に歸するこして、西方の行者雜行を捨て、正行を修すべし彌すべからく雜を捨て專を修すべし、豈百即百生の專修正行を捨て堅千中無一の雜修雜行を執せんや、行者能これを思量せよとあるを御相承なり、隱彰義曰二類往生を立て雜行をゆるす、鎮徒等能これを思量せよ。一心歸命は天親曇鸞の高判にて、天親論主は一心は無碍光に歸命す、論主の一心とさけるをば曇鸞大師のみこごころには、他

御 文 講 話

力の信このへたまふの讚意、證の卷には、論主は廣大無碍は一心を
 宣布して、普徧雜染堪忍の群萌を開化し、宗師は大悲往還の廻向を
 顯示して、慇懃に他利々他の深義を弘宣したまへりありて、信の
 卷の三信一心に、二重の間答あるをいよく、明らかに拜見すべし、
 阿彌陀經に一心不亂の言あれども、小本の一心は深あり淺ありて
 自力の淺心にもなる事あれば、はじめより阿彌陀經の一心にていは
 めものなり、大經の三信を合したる一心にて、論主の世尊我一心の
 一念歸命なるものこれなり、一念といふは、信心二心なきがゆへに
 一念といふ、是を一心と名づく、一心に則清淨報土の眞因也とある
 一心にて、涅槃眞因唯以信心の眞因なるがゆへに、信心をもつて本
 させられたる、聖人一流の御勸化のおもむきなりと自信教人すべし

御 文 講 話

不可思議ノ願カトシテ佛ノカタヨリ往生ハ治定セシメタマフコは、
 先年出せし三帖和讚歡喜鈔にくわしくかきたる如く、四十八首の中
 は、若不生者の往生かならずさだまりぬるごありて、つぎに大信力
 を歸命せよとある、その大信力すなはち願力の力たる事を示めて
 法藏願力のなせるなりとあれば、願力の不思議として往生をさだめ
 たまへる御ごはりにて、すなはち一心に彌陀に歸命すればの、一
 念歸命なるがゆへに、あごにもさきにも歸命せよの數十句ありなが
 ら、一ヶ所も歸命の言に左訓なくして、大信力を歸命せよの歸命は
 かりに左かなをつけさせられ。歸の字ニヨリ反タノム反ごあり、命
 の字ニ「オホセニシタガフミヤウノコトバナリメシニカナフトイフ
 ナリ」ごなされてあり、これは次上の讚に信樂まごごにさきいたり

御文講話

一念慶喜するひとはさありて、その信樂の左訓に、「コムガウノシン
 シムナリ、コノタリキコムガウノシンシンノサダマルトキ、アミダ
 佛ノオンコ、ロニカナフトシルベシ」さありて、次の句が一念慶喜
 なるがゆへに、此連續の二首を合せて、一念歸命なるゆへに、こ
 れ信樂まここにささいたりたる一念に、歸命のここはりを知らしめ
 んと、此所の歸命にばかり「ヨリタノミ」「オホセニシタガフ」「メシ
 ニカナフ」信順信受の信樂受持たる左訓をつけたまへるものさうか
 らはるゝなり、今このごろの歸命すれば、願力にて往生かならず
 治定せしむるの義を引あはせて受得すべし、此外願力の不思議談は
 佛智不思議誓願不思議名號不思議等の法門の常なれば、別にいふべ
 きもなく、末燈鈔の御示めし建長四年二月二十四日の御消息に、往

御文講話

生はごもかくも凡夫のはからひにてすべきことにもさふらはず、
 めでたき智者もはからふべきことにもさふらはず、大小の聖人だに
 もごもかくも、はからはてたゞ願力にまかせてこそおはしますこと
 にてさふらへ」こと、これらの類文あぐるにいごまなし。ソノクラ井
 ナ一念發起入正定之聚トモ釋シとは、帖外の御文の第二通、文正元
 年の章に、親鸞聖人の御勸化の一義のころは、一念發起平生業成
 きたて、もろくの雜行をも、雜修のころをもなげすて、一
 心一向に彌陀如來をたのみたてまつるころの餘念なきかたを、信
 心發得の行者といへり、さればこのくらゐの人を龍樹菩薩は即時入
 必定といひ、曇鸞和尚は一念發起入正定之聚と釋したまへりさある
 にて、今章の依文をかながれば、曇鸞の論註解のはじめに、易行

道だうとは、謂いは但た信しん佛ぶつの因いん縁ねんを以もつて淨じやう土どに生しやうぜんご願ぐらんずれば、佛ぶつの願ぐらん力りきに乗じやうじて便すなは彼かの清しやう淨じゆんの土どに往わう生じやうするこをうる、佛ぶつ力りき住じやう持ちして即すなは大だい乘じやうに乘じやうじて正しやう定じやうの聚じゆに入いる、正しやう定じやうは即すなは阿あ毘ひ跋はつ致ちなり」こあるを、一ねん念ぼつ發ほつ起き入にふ正しやう定じやう之し聚じゆ九く字じにつゞめて引ひかせられたるものなり。然しかれば、此この一いつ通つうには龍りう樹じゆの即すく時じ入にふ必ひつ定ぢやうは引ひてなけれども、龍りう樹じゆ菩はつ薩さつの毘び婆は沙しや論ろんによりて菩はつ薩さつ阿あ毘ひ跋はつ致ちを求もとむるに二しゆ種しゆの道だうあり、一ひ者じやう難なん行きやう道だう二ふ者じやう易い行きやう道だうとしてその易い行きやう道だうの釋しやくに、信しん佛ぶつ因いん縁ねん乘じやう願ぐらん力りき佛ぶつ力りき住じやう持ち入にふ正しやう定じやうこあるこころゆへに、即すなは阿あ毘ひ跋はつ致ちなりもこのこころにてらし合あはせて、正しやう信しん偈げの龍りう樹じゆ章しやうの憶おく念ねん彌み陀だ佛ぶつ本ほん願ぐらん自じ然ぜん即すく時じ入にふ必ひつ定ぢやう合あ入にふして、次つぎの御おん文ぶんの、ソノウヘノ稱しやう名み念ねん佛ぶつハ如に來らヲガ往わう生じやうヲサダメタマヒシ御おん恩おん報ほう盡じんの念ねん佛ぶつを、唯ゆ能のう常じやう稱じやう如に來ら號ごう應おう報ほう大だい悲ひ弘くわ誓せい恩おんこして拜はい見けんすべし、然しかれば、信しん

佛ぶつ因いん縁ねん乘じやう佛ぶつ願ぐらん力りきを一ねん念ぼつ發ほつ起きのこころ、こゝろへ雜ざ行ぎやうを捨すてて、彌み陀だに歸き命みやうする信しん心しんのかへこころば、今いまの帖てふ外わいのモロくの雜ざ行ぎやうヲモ雜ざ修しゆノコ、ロモナゲステ、一しん心しん一いっ向かうニ彌み陀だ如に來らヲタノミタマツルコ、ロノ餘よ念ねんナキ」こころご人ひとにもおしへきかしむべし。此この稱しやう名み念ねん佛ぶつをこなふるにつきて、六じ字じの稱せうかたをあやまちなきやうにすべし、聲しやう明めいこいふて、ふしはかせのつごめには、六じ字じのこめの佛ぶつの字じを、「ブツこも」ブツこも「ブツこも」いふ事ことあれども、稱しやう名み念ねん佛ぶつする聲こゝろは、「ブツこも」いふものにあらず、「ブツこも」いふべし」ツこもいふ事はなき事ことなり、只ただなむあみだぶくくこもいふべし、又また「ナモこも」かながあるゆへに「ナモこも」アミダこもいふものもあれども、それこももあしき事ことなり、むかしも今いまも彌み陀だの六じ字じ名み號ごうこいへば、「南なん無む阿あ彌み陀だ佛ぶつ」こ六む音ごんより外ほかはな

御 文 講 話

き事なり、悪しくこなへては誠に勿體なき事なり、僧分は此事よく
 く心得へし、御文よむにも南無といふ二字のこゝはこゝ、いつもい
 つもナモくこよみたる人あり、われ小僧の時にわかしくおもひた
 る事なりしが、今年七十五歳になりたれどもやはりわかしくぞあ
 りける、これが若ナモのブナのさいふ物ならば、空也上人の詠歌に
 も、ひこたびもなむあみだぶさいふ人の、花のうてなにのぼらぬは
 なしも、なもあみだぶつさいふ人のこなをすべきや、法然上人の詠
 歌にも「しゝてのちわが身にそへるたからには、なむあみだぶにし
 くものはなし、其外古徳の詠歌に、立杣やなむあみだぶのこゑきけ
 ば、西にいざなふ秋の夜の月も、下の句をなもあみだ佛になをさね
 ばならぬになる、又佛の字はブナにて、ブツともよむ字なり、梵字

御 文 講 話

にては^アいふ字なれば、^ヰにウをつぎたる字なれば、^ヱなれども
 さいふ、涅槃點あるがゆへに、^ヱなりさいへども、それは梵字を
 知りたるばかりにて、^アの涅槃點ありても、やは^ヰりこよむな
 り、涅槃經でも涅槃經の疏でも、^ヱ應等の音義にも、みな^ヰに^アの
 字阿の字がつけてあり、^ヰさいよみて^ア點ありても、^ヰはこなへ
 めものなり、^ヰは入聲のわけあれども、詩作する人でもフツクナキ
 には平字なしこゝろへている悉曇の摩多體文をよむものでも、ク
 キツナフの三内のわけ知りて、いる聲にこなふるときは、^ヰでも^ヰ
 なり、^ヰても^ヰなり、たこへば願作佛早作佛を願作佛早作佛トヨミ
 作禮而去を作禮而去こよむが如し、作法を作法とも、木綿を木綿こ
 もいふやうなるものなり、^ヰの^ヰの字も^ヰ字に^ヰ點をかけたる字

御 文 講 話

なれば、おなるゆへに假名には無トつけてあれども、無ごなへるものご知へし、大和尚といはる、浄土坊主の出たる板本に、「ナムアミダブツごしかくご七音にごなへよ、ナムアミダブツごなへるは不正義なりごかきてあり、然れども、木魚たきてごなへるに、たれもそれをもちゆるものなく、むかしよりごなへきたりたるごをりに、「ナムアミダブツごごなへるこそ、自然の稱名念佛なれ、辟邪訓和尚はいふ事きかぬをはらたちてにがくしくおもふべけれども、しかたはなし、勤行の聲明にもブツごも、ブツンごもいはず、阿彌陀佛ごつごむるあり、これは古書には佛陀浮陀歩陀ごありて、佛陀は入聲なり、浮阿平聲なり、歩陀は去聲なれども、平去入の三聲ごにもごなふるごきは、みな同じ飛なる事のふるくつたは

御 文 講 話

りたるなるへし、法然上人の詠歌にも、あみだぶご云よりほかは津の國のなにはのこごも悪しかりぬへし、あみだぶつご、心は西にうつ蟬の、もぬけはてたるこゑぞすゞしき、あみだぶご十聲唱へてまごろまん、ながきねふりになりもこそすれ、あみだぶご申ばかりをつごめにて、浄土の莊嚴見るぞうれしき、これらもしかくごブツご仰せなきゆへに、不正義の御ごなへかたなりご、大我和尚は不承知なるへし、人はごもあれかくもあれ、今家眞宗の御門下は、彌陀大悲の誓願を深く信ぜんひごはみな、ねてもさめてもへだてなく、水ぎぬを稱ふへしアナカシコく。

第十一通

御正忌之章

抑●コ●ノ●御●正●忌●ノ●ウ●チ●ニ●參●詣●サ●イ●タ●シ●コ●、●ロ●ザ●シ●テ●ハ●コ●ビ●報●恩●謝●德●ヲ

ナサントオモヒテ聖人ノ御マヘニマイランヒトノケカニオイテ信心ノ獲得セシメタルヒトモアルベシマダ不信心ノトモガラモアルベシモテノホカノ大事也。こは、他章にて、一切ノ女人ノ身ハ、後生ヲ大事ニオモヒ。こも、後生ノ一大事ヲ心ニカケテトモ、後生ノ一大事ヲバタスカルベキツトモ、今度ノ一大事ノ報土ノ往生ヲトグベキトモ、後生コソ一大事ナリトオモヒテトモ、一大事トイフハコレナリ。こもありて、法華經の方便品には、唯以一大事因縁ごありて、唯は獨なり、一大事は此事唯一ツのために出現の如來にて、法華經にては、諸法實相の唯一を除て、餘は魔事なりとす、聲聞緣覺菩薩の三乘法にもあらず、それに人天を加たる五乘にもあらず、それに通教の二乗を加へたる七にもあらず、それに通別の菩薩を加へたる

御 文 講 話

御 文 講 話

九にもあらず、此三五七九にあらざるを一といふなり、大は今の三五七九の小法門にあらざるを大といふなり、これすなはち如來出世の本懷なりとするを事といふなり、これは法華經にての法門釋迦の遺教なり、彌陀法にては、阿彌陀經の同本異譯の稱讚、淨土佛攝取經にては、舍利弗我是の如の利益安樂の大事因縁を觀じて、誠諦の語を説、若淨信ある善男子善女人は、是の如く無量壽佛の不可思議の功德名號極樂界の淨佛土を聞ここを得者、一切皆信受して發願し、如説に修行して彼佛土に生ずべしと説たまへり、これが安樂の一大事なるがゆへ、御本書の教の卷には、何を以て出世の大事と知ここを得ることして、大經を判じて一乘究竟の極説として、行の卷には、大利無上者一乘眞實の利益なり、小利有上者八萬四千之假門也

ごありて、一乗は大乗なり、大乘は佛乘なり、二乗三乗あることなし、二乗三乗は一乗に入しむ、一乗は即第一義乘なり、唯これ誓願一佛乘也と示めさせられ、誓願不思議一實眞如海、大無量壽經の宗致、他力眞宗の正意なりとありて、信の卷には信心をもつて、眞如一實の信海とて、不可思議不可稱不可說一乘大智願海廻向利益他の眞實心なりと示めし、横超斷四流の下にては、豎超は大乗眞實の教、豎出は大乗方便の教、横超は一實圓滿の眞教眞宗是なりとあり愚禿鈔にも、本願一乗は頓極頓速圓融圓滿之教絶對不二一實眞如之道也とて、一乘一實は大誓願海なりとあるにて、大事も一大事ともあるこゝろを淺からぬ御ことはりと知るべし、さりながら御文にある大事なりも、一大事これなりもさほごの事もおもはれず、

世間のかるき俗語にては心にかけよといふの義のみおもふならんか、一大事といふはこれなりも、一大事を心にかけよも、經説の大事、一大事の佛語と輕重のあるべき事なし、大事の爲に、出現の如來も眞如實相の外なければ、五帖一部の勸章も、一心の佛因を示めすの外なく、その一心は佛果の眞因なるときは、信不信を分別してもつての外の大乗なりとは、これぞ佛因の邪正を分別の大事にて、御宗意にこりてはこれにすぎたる一大事はなし、黒谷上人の御示めにしに、心をしづめてよくよくあんじて御らんさふらへ、これにすぎたる一大事何事かさふらふべきと、おほせられたるも、兼好のつれづれ草に、衣食住の三は、人間の大事なりとかけられしも、この世の大事は食物なり、後生の大事は信心なり、これが唯一乘法無二亦

五帖目 八百五十

無三の如來、出世の本意なる本願眞實の念佛法門にて、法華念佛同體異名の今家、鼻祖の教行信證の奥義なることごもは、今度開板流行の、觀經隱彰義の中に、辨別して法華と念佛と同時の經といへる義理を和説せし平假名繪入の物と合せて見るべし。サテ此法華の因便に一笑する事あり、先年宸殿にて講話の時、御前談終りて、自坊へ引たる時、六十歳ばかりの入道に、同朋と見ゆる俗兩人と來りて三人の中一人さきにたちたる者辨説さはやかにして、侍僧の圓龍へいひけるは、今日不圖をりかゝりて、法談をうけたまはり不審ありて、尋きたりたるなりといひけるゆへ、一應その旨趣をきかしむるに、かのももの辨舌さはやかにのべけるは、唯有一乗の唯の字ある經文は、法華經よりほかにはなき事うけたまはる淨土經にも、唯

の字あるならば拜見いたしたくといひける、我聞て又侍僧に問しむるは、俗人の法門にこゝろあるは殊勝の事なり、然れども唯の字のあるなしをき、たきごはめづらしきたづねなり、いふてきかすべししかし唯の字は知りてゐるかごたづねさせければ、俗人ごも三人ごもに口をそろへて、唯の字ぐらゐをぞんぜずしては、御たづねにはまひらずご、すこしはらたちたる面色にこたへたりご、取次のものいひけるゆへ、さあらば直にいふてきかすべし、次へごをれといひければ、三人ごもに目ごをりへ出たるゆへ、大經をひらきて、唯の字を見て、此字は此經中に澤山にあるゆへ、次第ぐにひらきて見すべし、これがまづはじめに見せる一字也知りて居るならまづ見られよといへば、三人ごもにのぞき見るゆへ、みへるかぐ、これは

大經の偈文のところに、釋迦一佛のところにあらず、十法界に彌陀法のひろまれる事を、恒沙の諸佛の一切菩薩に告たまへるところなり。經の文點をよむによくきけ、如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二乗の測ごころに非ず唯佛獨明了なり」といふ經文なり、如來ごあらは、阿彌陀如來にて、其彌陀の智慧のふかきごころは、海の底の知れざるが如く、二乗は聲聞乘菩薩乘にて、彌陀の智慧海は、菩薩阿羅漢の測ごころにあらずと説たまひてある、此經文を見べし。聲聞或菩薩莫能究聖心譬如從生盲欲行開導人ごあり、これも點つてよめば、聲聞乘菩薩乘にては、佛の聖心は測究むる事あたはず、譬ば生盲にて生つきの盲が人を導ご案内するが如しごの佛説なり、菩薩さへ生盲にたごへて知るはづなき彌陀法なりごあれば、凡僧の

知るべきにあらず、次に又見るべし。聲聞菩薩一切光明皆隱蔽唯見佛光明曜顯赫ごあり、この文點は、聲聞菩薩の一切光明は、みな隱蔽て、唯彌陀一佛の光明の顯赫なるごありて、無量壽佛の威德巍巍たるごころ、須彌山王の一切諸の世界の上に高出するが如ごあり、拙老兼住する、この寺を明顯寺ごいふも、その明顯顯赫の文字なるものなり、此唯の字も見ておくべし、其方たちは唯の字がき、たきごて見へたるは、何のためかは知らねごも、察するごころ、念佛無間禪天魔諸宗無得道法華獨成佛ごいふ日蓮黨ならん、其宗旨の僧分より何も知らぬ俗人をすゝめごみ、唯有一乘は法華經ばかり、唯有一乗も他經にはなき事ごいふて、あざむくゆへに、大經に唯佛獨明了も、究竟乘至于彼岸のあるも知らず向ふみずに、此方までもつ

御 文 講 話

めこみに来る心中は、俗人に無理はなし、正直に法をきく心よりの事なれば、よき事をおしへたらば、よき人にもなるべき佛法の信者を悪しくそだてたるものなり、此末ごても其宗門の僧のいふ事はかりきゝて、向ふみず他宗門の人に對して、對論なごこのむ事はつゝしまれよ、すでに尾州名古屋橋町の榮國寺は、元は千本松といふ野原にありて、尾州領内の切支丹を一時に死罪の地にて、數多の亡魂出て人に崇をなしけり、其頃開基の珂信和尚清凉庵といふ柴の戸にて、念佛して居られけるに、亡魂いつるごごなく、崇をなすごごやみけり、これによりて庵號を山號とし、切支丹滅亡していよく國の榮を祝せる寺號を以て起立し、清凉山榮國寺として、城主より寺領三百石を附與しおきたまへる浄土宗西山派の大寺なり、われ其

御 文 講 話

寺にて、佛曆講釋せしごご數度にて、東六條の御坊にこなれば、わけて人のよく知るごころにて、其寺の涅槃像の大幅なるは、日蓮宗身延山久遠寺什物と書てありて、又次に本能寺什物とあり、はじめの寄進人の法名日の字あるをならべかきたる物なり、熱田本能寺は法華檀林にて、同所正覺寺も浄土檀林なるに、兩檀林宗論起りて、公訴におよび江戸にての對決の時、日蓮黨よりの申口は、此度の對論に浄土宗まけたらば、浄土坊主の首を切て、獄門にさらし、寺はつぶして佛像經卷は焼捨たまへごいふ、浄土宗よりは日蓮宗まけたらば、その僧は此方の弟子にならしめ、佛像經卷は此方へ勝たしるしにわたさせたまへご、雙方ごもに、奉行所へ申立、さて其日にいたりて問答の所に、數言の問答學力をつくして、難達互に義理を成

御 文 講 話

ぜんごはしたりけれども、つるには法華の日蓮がたはまけて閉口せり、時本能寺の什物のこらず浄土宗へわたしたまはりける、其佛像の中にありし涅槃像を記傳ごにも榮國寺に傳ける物なり、かゝるたゞしき浄土宗の寺々に、其耻辱の今の世までものこりて、毎年二月の涅槃會にむかしの事をかたり出すも、みな我慢なる宗風ゆへなれば、つゝしむべしと誠めければ、右の口上さはやかなる男は、さすがに手をつきてしばらく御ゆるし下され、小用ちかく候て、座をたちけるのこる二人も、ごにも小便にゆきけるおもむきに見へけるが、三人ごにも、もこの座にはかへらぬゆへ、侍僧便所へ見にゆきけれども、一人も見へざりける、めしつかひの小者にきけば、小用所へはゆかれずさしあしぬきあしにて、その時門外にいであられし

御 文 講 話

ごいふをきゝて、小便のうそてほつけの逃尻は、だぶぐぐぐごたれながしかなしと興じき、かへすぐも領解文にて、いひのぶる一大事の後生、御たすけさふらへごたのみまふしてさふらふも、六字のまゝの眞實心至心廻向の物がらなれば、誠に安樂の大事因縁たる得聞佛名の淨信なりと知るべし。ソノユヘハ信心ヲ決定セズバ今度ノ報土ノ往生ハ不定ナリごは、次の文よりみれば、世間に流布の但口稱の念佛はごなへて、いるみな人なり、それを今決定なき不如實の念佛者、不定聚の機なるがゆへに、報土入は不定なりごしたまへりサレバ不信ノヒトモスミヤカニ決定ノコ、ロヲトルベシ人間ハ不定ノサカヒナリ極樂ハ常住ノ國ナリサレバ不定ノ人間ニアランヨリモ常住ノ極樂チ子ガフベキモノナリごは、スミヤカは速疾の字にて、

御文講話

速も疾もいそぎて、信心を決定せよこの鞭策なり、其一鞭の一言を受て、人間は不定の世界なり、いのちのうちにいそげくこして、その不定によりて常住の極樂をつらねてかの鞭策をむすびたまへり御筆にまかせられての御示めしなるべけれど、巧妙の御文體なり常住の極樂は、大經の建立常然無衰無變、禮讚の淨國無衰變一立古今然なり、サレバ當流ニハ信心ノカタチモテサキトセラレタルソノユヘチヨクシラスハイタヅラコトナリイソギテ安心決定シテ淨土ノ往生チチガフベキナリとは、開山御正忌の御文ゆへ、わけて御一流の信心爲本の御勸化なり、本願にては三信十念と次第ありて、信心して行ずる信心行となるがゆへに、善導にても安心起行、元祖にても安心起行の次第は、本願のまゝを示めして、前後轉倒の異論はなし

御文講話

當流聖人の御相承これなり、そのゆへをよく知らずば、祖門にありては誠にいたづらごこなり。ソレ人間ニ流布シテミナ人ノコ、ロエタルトナリハナニノ分別モナククニタ、稱名バカリヲトナヘダラバ極樂ニ往生スベキヤウニオモヘリソレハオホキニオボツカナキ次第ナリとは、第十八願は信心具足の念佛なればこそ、念佛往生の願名もあるなれ、十九二十の願心なる人も、念佛の人にはありけれども攝取不捨の念佛者にあらざるゆへに、臨終をまち來迎をたのみ、果遂のちかひに歸したるくらい的事なるがゆへに、念佛往生の願により等正覺にいたれるの人體にはあらず、眞實報土へのぞめては千中無一萬不一生の輩なり、眞實報土の往生はおぼつかなしこの文面なり。人間に流布して、みな人の心得たる但口稱の念佛は、自流他流

御 文 講 話

自派他派ともに、一同の時代に見へて、他章にても、世間に沙汰するところの念佛といふは、たゞくちにだにも南無阿彌陀佛ごごなふれば、たすかるやうにみな人おもへり、それは覺束なきごごなりごも、又世間にいま流布して、むねごすゝむるごころの念佛ごまうすは、たゞなごの分別もなく、南無阿彌陀佛ごばかりごなふれば、みなたすかるべきやうにおもへり、それはおほきにおぼつかなきごごなりごもありて、世間人間に流布してあまねくこゝろうるごは、堯王丹朱をはじめ、皇子はみな非器なりごて、重華に撰て王位をゆづるに、「天下は一人の天下に非ごて、舜に授舜王も禹王に授けて、天下は一人の天下にあらずごあるが如く、念佛往生の本願、當流一家の法門にあらず、世間人間一同に正義にもごづかしむるの普共

御 文 講 話

諸衆生往生安樂の悲化なり。他力ノ信心ヲトルトイフモ別ノコトニハアラズ南無阿彌陀佛ノ六字ノコ、ロチヨクシリタルヲモテ信心決定ストハイフナリごは、よく知るごて、智解を發して、物をおぼへる事にはあらず、名號の中にあるものは佛心なり、その佛の御心を聞得たるをよく知るごいふなり、それを信心決定ごするごの御示めしなり、もろごし周か代の大王隣の戎國よりいくさを起して、打ごらんごせしごき、周の大王ははらをもたゝず、犬馬珠玉をおくりて禮をなし、和合してたがひにむつまじくせんごしたまへごも、戎國よりはせめたゝかひて、國をうばひごらんごするゆへ、周の方の百姓はらをたちて大王あやまりたまふ事なかれ、我々命をかぎりにふせぎたゝかひて、戎の方をせめほろばさんごいさみすゝむを周の

御文講話

大王これをおさへて示めさるゝは、我國の王となりて、世をおさむるは何のためぞや、民をなで人をあはれむにてこそ、王の王たる撫育の本意なれ、それゆへに戎に物をおくりて、むつまじく和らぎくらすんご、心を通じたるなれども、きゝいれねば詮方なし、我もしかれごいくさせば、かれが方にも人おほく死ぬへし、我國のものも幾そこばくの人民ころされて、その妻子まで憂目にあはんご、それのみ不便におもひての和睦を乞合なり、然れば百姓ごもの志はきこへたれごも、我大將ごしてたゝかひはせず、又悪しきにもかぎりなく、よきにもかぎりなければ、我國をおさむるのみをよしごはせず戎きたりて治るごき、我にまさりて政事たゞしく、四民撫育のたゞしき事もやあらんも知らずごて、大王幽ごいふ所を退きて、岐ごい

御文講話

ふ所へうつりて、國を開け渡して、戎國の王にわたしたまへるに、其周王の御仁心を知て、百姓一人も戎にしたがはず、みなく、妻子ひきつれく、岐山の麓へあつまりて、周王をはなれざりしゆへ、戎王は何の詮もなく、おのれご國はほろびてしまひ、周王の子孫はさかへて、國王にてありしをためし、まれなる天下の平かなりし周の世ごいふは是なり、今も佛の御ごゝろを知りたる衆生佛の御袖にすがりまひらするおもひの外なき、一念歸命は、南無阿彌陀佛の六字の心をよく知りたる、信心決定の百姓なり、史記も左傳も字をよみて物知りがほばかりにては、論語よみの論語知らずなり、家をおさめ身をおさむるに、古先聖王の政ごごを、今世にうつして行人ならば、學ばぬ人も學びたるにまされり、佛法は知りさふもなきもの

御 文 講 話

が知るぞごもあるこれなり、經釋の文字學をして釋講師になりても
 論釋よみの論意知らずなるべし。ソモノ信心ノ體トイフハ經ニイ
 ハク聞其名號信心歡喜トイヘリこは、改邪鈔に願成就をもて至極こ
 すごあること今家法脈の常談なり。善導ノイハク南無トイフハ歸命
 マタコレ發願廻向ノ義ナリ等こは、上にてきこへおはりたれば、ふ
 りかへりて寸珍をみるべし。サレバ南無阿彌陀佛ノ體ヲカクノゴト
 クコ、ロエワケタルヲ信心ヲトルトハイフナリこは、上には信心の
 體こいひ、今は名號の體こある事、出體釋名こいふこきの信心こ名
 號こ釋名はかはれごも、其體は同じ物にて、信心こて六字のほかに
 はあるべからずの出體なり、すなはち機法一體の體の字にもあたる
 こ知るべし。コレスナハテ他力ノ信心ヲヨクコ、ロエタル念佛ノ行

御 文 講 話

者トハマウスナリアナカシコノこは、今章の發端の信心のかたを
 もてさきこせられたる、そのゆへをよくこゝろへたる念佛行者たる
 もの也、示珠指に、名號こ信心こ其體別にあらず、名義の差別なり
 名は聞思の境義は、思惠の境なり、其名を聞其義を思惟して、一念
 發起するなり、名義相應を信心の體こすこあり、心得ありての注述
 なり、又記事珠に、稱名の稱の字こなふるこ訓ずれば、重言なるに
 似たれごも、假名のものは重言をかまはぬ事、萬葉集源氏物語な
 ごにその例多し、俗語に順じて、愚癡無智の者に對して、心へ易か
 らしむるなれば、言詞をかひつくるはざるなりこあり、これもきを
 つけての解釋なりけり。

第十二通

如來御袖之章

此一通は二帖目の十三章に、夫當流にさだむるところのおきてをまもるさいふはごある、御文のなかば以下の御文言に同じければ、示珠指は、其二帖目にて解釋して、今章にては、第十二章二帖目に出このみありて一言もいはず、記事珠は、分別を加へて、二帖目には、智慧才覺もいらすの次に男女貴賤もいらすの句あり、又今文には、彌陀如來の御恩をおもひはかりごあるを、二帖目には、彌陀如來の御恩の有難きほごを、よくよくおもひてごあることごもを、くはしく對映してあり、御文句を拜見のくはしきごは、示珠指にまさされり、今寸珍にては、二帖目にては註解せずして、五帖目の第十二通に同ければ、其章にいたりて辨釋すべしごして、今章にゆづりてのこしおきたれば、今此所にて委辨別するに、「まづ二帖目の章は、文

明六年七月三日ごあり、今の五帖目はすべて年月のなきをあつめて一帖ごなされてあれが、時日は知れざれごも、おのづから御老後の御筆にて、御往生ちかよらせたまひては御文も御ごばすくなく、安心も肝要のみを御示めしごあるにあたれるなり、又章目も二帖目の方は、當流掟之章ごして、今は如來御袖之章ごせしごは、先年我等若齡の頃流行せし三業たのみの輩、此一章を闇じ記てもてはやし御袖の御文章ごて、身口歸命の相ごして、御本尊の繪像木像の御袖はすがるおもひをなせ、聞たるまゝの信念にては、一念歸命の正規則にあらず、聞てもく六字には、御袖がなきゆへに、すがるおもひはむねにうかまぬ、眼に見へて御袖のある繪木の形像にむかひ口には佛たすけたまへご申せごも、たすけたまへご申さん女人をた

御 文 講 話

すけるごもあれば、口上にて後生たすけたまへといひ、意にてはたすけたまへとおもひ、身は阿彌陀如來にむかひたてまつりて、後生たすけたまへご身語意の三業をそろへて、一期に一度しかたのため、願生歸命辨に書あらはしてあるが如く、形像歸命をたゞしくして、御袖にすがりつき、「いだきつくおもひが彌陀の三業ご、行者の三業ごひごつになるおもひなりとて、其時代の三業僧の法談には、御袖くを數言いひしごとなり、それゆへにそのころの傍觀人のたはふれに、法談僧を評するに、正義法談を蒲團法談といひ、不正法談を夜着法談といふ、そのたはふれの夜着蒲團は何ゆへぞといへば、新義には袖があるで夜着法談なり、古義には袖がないで蒲團法談なりといふ、「たはふれながら其時代の法談のおもむきをはかりて知るへ

御 文 講 話

し。阿彌陀如來ノ御袖ニヒトシスガリマイラスルオモヒチナスごは手を出してすがりつくにはあらざるを、すがるおもひをなすごのたまへるなり、すなはち御衣の袖にすがるおもひをいふ、法華經の法師品に、如來の衣ごは、柔和忍辱の心是なりと説たまへる、その御こゝろにすがるおもひの事なり、御袖は「むかしは袖につゝみけりも「かたみに袖をしぼりつゝも、歌のこごばにはつねにいふなれば墨染の袖なごよめる風俗にしたがひて示めしたまへるものなり。後生ヲタスケタマヘトタノミマフセバごは、たすけたまへご深く心に疑ひなく信ずることなり。阿彌陀如來ハフカクヨロコビマシマスごは、無量壽如來會の經説に、妙法を聽聞すれば、常に諸佛をして喜びを生ぜしむ、ごある御こゝろにひごし。其御身ヨリ八萬四千ノ大

御 文 講 話

ナル光明ヲハナチテ其光明ノ中ニ其人ヲオサマイレヲキタマフベシ
 さは、上にのべたまへる、後生たすけたまへは信心にて、當流のこ
 ころは、彌陀をたのむが念佛の義なるがゆへに、信心衆生攝取
 不捨の義を成じて、念佛衆生攝取不捨の文を引たまへること、常談
 にて、末代無智の章に、阿彌陀佛を深くたのむ信心をのべて、「これ
 すなはち第十八の念佛往生のころなりとあるに同じ。光明ノ縁ニ
 モヨホサレテ宿善ノ機アリテ他力ノ信心トイフコトヲ今スデニ得タ
 リとは、口傳鈔に、光明の縁にもよほしそだてられて、名號信知の
 報土の因を得し知べしとなり、是を他力といふなり」とあるにて知
 るべし。行者ノオコストコロノ信心ニアラズとは、大經にて尊者阿
 難の座をたちしも、佛の聖旨をうくることありて、阿難はたれにもお

御 文 講 話

しへられはいたさぬわたくしがおもひつきにて、座をたちて御たづ
 ね申ましたといへども、佛のころを知る事は、等覺の彌勒でもは
 かり知れる事にてはなきが故に、自ら問たつねたことおもひても、
 みな佛のかたよりさづけましくたる聖旨にいふものなり、然れば
 その信心はなをさら佛心なりと知るべし、信心といふ二字をまこと
 のころごよむうへは、凡夫の迷心にあらず、全く佛心なり、この
 佛心を凡夫にさづけらるゝとき信心といはるゝなりとあるも、如來
 清淨本願の智心なりとあるも、みなこのあたりのかゝりあひ也、因
 分可説果分不可説のことも調合すべし、又八萬四千の光明につきて
 は、觀經の第九觀に、眞佛の身相を説たまへる眞身觀といふところ
 に、佛身の高さ六十萬億那由陀恒河沙由旬なり、乃至無量壽佛に八

萬四千の相あり、一一の相に各八萬四千の隨形好あり、一一の好に復八萬四千の光明あり、一一の光明偏く十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨たまはず」ごあり、これを御開山の御本書化身土の卷には、謹で化身土を顯さば、佛者無量壽佛觀經の説の如く、眞身觀の佛是也」ごなされてあり、然れば、八萬四千の大なる光明偏照は化土化身の佛光なり、報土往生の他力大信心の行者たる淨土眞宗の我も人も、方便化土の佛身の八萬四千の相に具したる、八萬四千の隨形好の光明に攝取れて居もなんぞわけのあるごならんご小僧のごもがらは、老僧のさしづを聞べし。又この一通の始終を拜見するには、信の卷の本願力廻向の信心を明したまへるごところに、眞實の信心は、即是金剛心即是願作佛心即是度衆生心、度衆生心は即是

衆生を攝取して、安樂淨土に生ぜしむる心なり、是心即是大菩提心是心即是大悲心是心即は無量光明慧に由て、生するが故に、願海平等なるが故に、發心等、發心等が故に道等、道等きが故に大慈悲等大慈悲者是佛道の正因也」ごあるごころをよく領納して、一座の法談をもすべし。聞て居尼女房は、何をさへても有難くおもひて稱名念佛さへすればよしごすれごも、法を談ずる身からは、いかにもく學問して、本願の由來を知りて説されば、不淨說法なるべし「これにつきて一笑することあり、我等若年の頃なりしが、いかにも無學文盲なる老僧の美濃大垣常福寺といふ大寺にて、法談して居るを立聞しけるに、其老僧の辨説に、此御文の讚題にて安心をいふごころは、すこしもくあやまりなく、殊勝にきこへけれごも、文

をさばくごころをきけば「サテ此御袖にすぎることあるは、十八願ご
 三十五の願ごにすがれごいふことなり」「いろは四十八字は四十八願
 の數にて、それをいの字よりかぞへて、いろはにはへごちりぬるを
 わかよたれそつねなの「その字か十八にあたりてある、これが十八
 願なり、又いの字よりかぞへて、やまけふこえてのての字が、三十
 五にあたりてあり、これが女人成佛の御ちかひの三十五の願なり、
 かるがゆへに、今この御文にて、阿彌陀如來の御袖のすがれごある
 は、十方世界の念佛衆生五障三從の女人をも、十八願ご三十五の願
 にて成佛せよごすゝめまします御事なり、切もせぬやぶれもせぬ、
 御袖であらふがなご、同行をよびかけて大音聲にて辨ずれば、九間
 四面の堂内に稱名念佛の聲鳴わたり、同行たがひによるこびて、さ

御文講話

てく有難ひ、此よな御ゆはれは外ではきかれぬくごいふ聲の
 老僧が耳にも入たるならん、無學阿羅漢ご異名ある老僧は、うれし
 げにゑみをふくみて、あてたりくあたりたりごよろこびのいろを
 ぞ見へける、同行は罪なし、老僧は譯なしなり、書見の眠さましに
 すべし。

第十三通

六字功能之章

ソレ南無阿彌陀佛トマウス文字ハソノカズワヅカニ六字ナレバサノ
 ミ功能ノアルベキトモオボエザルニコノ六字ノ名號ノウチニハ無上
 甚深ノ功德利益ノ廣大ナルコトサラニソノキハマリナキモノナリご
 はまづはじめに、御本書の行の卷の御こゝろを示めして、淨土眞實
 の行體を示めしたまへるなり、すなはち行の卷より信の卷へ次第し

御文講話

御文講話

たまへる御ころの此一通なりと拜見すべし、行巻の發端に、諸佛稱名之願、淨土眞實之行、撰擇本願之行。謹て往相の廻向を按ずるに、大行あり大信あり、大行といふは則無碍光如來の名を稱するなり、斯行は即是諸の善法を攝し、諸の徳本を具す、極速圓滿眞如一如の功德寶海なり、故ゆへに大行と名づく、乃至爾者稱名は能衆生一切の無明を破し、能衆生一切の志願を滿、稱名は則是最勝眞妙の正業、正業は則是念佛念佛は即これ南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛は則是正念也と知べしとある、行體のここを今章のはじめに、南無阿彌陀佛とまふす文字は、そのかずわづかに六字なれば、さのみ功能のあるべきこともおぼへざるに、この六字の名號のうちには、無上甚深の功德利益の廣大なること、さらにそのきはまりなきものなりと

御文講話

御筆をひらきたまひて、次の御つゞけに「されば信心をこるごいふも、この六字のうちにもれりご知るべし、さらに別に信心とて六字のほかにはあるべからざるものなり」とは、教行證の三法の中に行より信をひらきたまひて、教行信證の四法として、信心爲本の眞宗一流を御建立の柱礎たるごころなり、この行巻を受けさせられたる次の續の信巻のはじめに、信樂を獲得するごころは、如來選擇の願心より發起すごありて、斯心即是念佛往生の願より出たりご示めさせられ、涅槃の眞因は唯信心を以てすごして、其本願三信を釋したまへるに、至心と言は、至は即是信也實也誠也、心は即是種也實也乃至斯至心は即是至徳の尊號を其體ご爲なり」と、行體すなはち信體なるここをあかさせらる、其御本書を表紙の破さふらふまで、御

覽ありてのうへにての御文の製作なるがゆへ、行信の次第のみだれ
 ざるここ、和讃にありては、彌陀ノ尊號トナヘツ、諸佛稱名之願（諸佛稱名之願）之行行卷
 信樂マコトニウルヒトハ、（至心信行之願）信卷、彌陀ノ名號トナヘツ、（諸佛稱名之願）讚嘆
（至心信行之願）聞其信心マコトニウルヒトハ、（至心廻向）行卷信卷の次第かくの如し、行
 卷の當體全是すなはち信卷なり、聞の當相すなはち信の一念なり、
 名號信受（名號信受）はこのことなり、無上甚深は、示珠指に引（示珠指）ころの法華
 論に明せる無上甚深如來所證の阿耨菩提、すなはち證甚深義甚深實
 體甚深等に類例して知るべし。彌陀をたのむ衆生は、無上大利の功
 徳をあたへたまふを、發願廻向（發願廻向）はまうすなりとあるは、ここさら
 に有難き事なり、善導大師の六字釋を引て、南無は歸命またこれ發
 願廻向（發願廻向）として、阿彌陀佛は其行（其行）と示めしながら、阿彌陀佛の四字の

釋はなし、發願廻向をそのまゝ、即是其行の義に明してあるにて、
 六字は一具の機法にて、南無阿彌陀佛の御廻向信（御廻向信）といふことをよく
 く知るべし、筆にて文字を書く（筆にて文字を書く）だすやうに運びならべたる信心に
 てはあらざることをよろこぶべし。三帖目の第六通に「南無の二字
 は、歸命（歸命）と發願廻向（發願廻向）との二のころなりとありて、其つゞきに「歸
 命の一念をころこき、遍照の光明をはなちて行者を攝取したまふな
 り、このころすなはち阿彌陀佛の四の字のころなり、又發願廻
 向のころなり」とあり、一通の中にて、發願廻向を南無のころ
 なりともあり、阿彌陀佛のころなりともあるにて、よくく六字
 安心の全體を頂戴すべし、これにつきては、二帖目の第十通に、一
 念南無阿彌陀佛と歸命する（一念南無阿彌陀佛と歸命する）とあるも、四帖目の第十三通に南無阿彌

陀佛ごたのめみな人ごあるも納得すべし。

第十四通 上藤下主之章

ソレ一切ノ女人ノ身ハ人シレズツミノフカキコト上藤ニモ下主ニモヨラズアサマシキ身ナリトオモフベシごは、存覺上人の女人往生聞書にあまたの經論を引たまへる中にも、あらゆる三千界の男子のもろくの煩惱をあはせあつめて、一人の女人の業障ごするごあるは涅槃經の説にてまごに人知れず深き罪のあるごごみへたり、又三世の諸佛のまなごは大地におちおつごも、法界のもろくの女人はながく成佛の願なしごあるは、心地觀經の説なり、又清風のいろなきなをこりつべし、虻蛇の毒をふくめるなをふれつべし、劍をこりてむかへるかたきにはなをからぬべし、女賊の人を害するは禁ず

べきごごかたしごは、智度論、又女人は地獄のつかひなり、ながく佛の種子をたつごは唯識論にて、龍樹天親の論判なり、其外示珠指のいふ呵色欲法經も、記事珠のいふ造像功德經も、人知れず罪の深きごごにて、言は蜜の如く心は毒の如しご説たまへるも、心不直にして所作を覆藏すごあるも、みな佛語なり、然るに其佛も其女人の胎にやごりて、世に出たまひ、祖師も知識も女人の産たるものなれば、三世諸佛も母ごはたのみたまへごも、成佛のごごにつきては障りあるごご、見へたり。上藤は堂上の女儀、下主は地下の女姓、すべての女人みな成佛の障あるごごは淺間しき身なる事は、いふまでもなきごごなり。ソレニツキテハナニトヤウニ彌陀ヲ信ズベキゾトイフニナニノワヅラヒモナク阿彌陀如來ヲヒシトタノミマイラセテ

御文講話

こは、信ずることばたのむことなる御示めし、いつも御文の御定格なり。わづらひもなくは、わづらはしきことなしとなり。アヤマタズタスケタマフベシこは、本願の御あやまちなく、やすくこたすけたまはるなり、すなはちつぎしもの御ことばの十人も百人も、こころく往生することばを、つゆほごもうたがはざるの本根なり。ナチくフカク彌陀如來ヲタノミタテマツルベキモノナリこは、示珠指には、幾度も奉憑こ云義には非也こす、記事珠には、此なをなをの御詞に就て、いくたびもたびく如來をたのめこ仰せある事こして、常だのみなご云法義を骨張する類あり、故に空公雪窓は、並に不然こ評破せらる、雪窓はたびく後生助給へたのめこには非ず、唯たのみにするこころを彌増にすべしこなりこ註す、空老の鈔

御文講話

にはたびく佛をたのめこ云やうにも聞ゆ、又一往一旦は薄しよくく厚く重く深くこ慳重の意にも聞ゆれども、上にかくの如くやすきことをいまで信じたてまつらざるここの淺間しさよこおもひての御詞あれば、かくばかり誓まします彌陀佛を知らで、久しく年をへにけりこ、昔の空く過にしを悔に付ても、一たび歸命の一念に往生決定する今を、喜こびてますく如來をたふこみ、いくへにも一念發起の信をたくはふべしこなり、淳心一心をうれば相成して、相續心をうるなりこ解せられたりこして、信可するに足りこいふ。これは叢林集にも、ヒトタビトハ二度ト對スル義ニ非ズ忝モノモニ同シこせり、今云寸珍のおもふこころは、此一章はここさらに信ずべきぞこいひたのみまいらせてこいひ、たすけたまへこいひ、

御 文 講 話

たすけたまふさいひ、たのみまうさばさいひ、信ぜん女人はさいひ
 信じたてまつらざるこのあさましささいひ、なをくふかくたの
 みたてまつるべきもの也さいひて、信ずるたのむ、たのむ信ずる、
 信じたてまつれ、たのみたてまつれ、信はたのむ、たのむは信こ
 示めしたまへることなれば、このころもたのむを信にていふなら
 ば、なをく深く彌陀如來を信じたてまつるべきものなりこの御こ
 となれば「いくたびも信じたてまつる義こしてもこがむべきにはあ
 らず、常だのみ骨張は、何こす、むるか知らねども、これも常信
 心のここにて、常疑のはれごをこなれば、有難きことなり、信の一
 念のおこるとき、攝取せられ往生をさだめたまへるは、佛のかたよ
 り治定せしめたまへるゆへ、往生治定の後なれば、如來わが往生を

御 文 講 話

さだめたまひしをよろこびけれども、信心は一度ぎりの物にて、常
 信心にはあらずせば、初發の信と相續の信と二重にあたへたまへ
 るさいふべき哉。蓮如上人御一代聞書本丁四十八日一念ノ信心ヲエテ
 ノチノ相續トイフハ、サラニ別ノコトニアラズ、ハジメ發起スルト
 コロノ安心ヲ相續セラレテ、タフトクナル一念ノコ、ロノトホルチ
 憶念ノ心ツチニトモ、佛恩報謝トモイフナリ」こあり、老々これこ
 のここにはあらずや、寸珍この心をのぶること今にはじめざるこ
 ごとに、三首詠歌の第一に、一度もほごけをたのむ心ろこそある
 五文字の二度も三度もたのむ常だのみの常信心の他想間雜なきまこ
 このへりにかなひける有難さを、つまびらかにかきたるをこのここ
 ろへあはせて拜見すべし、鎮西の願心だのみの常だのみは、度我の

義救我の義の助給なるがゆへ、そのたすけたまへと疑蓋無雜の信心のたすけ給へと深くこゝろに疑なく信ずるを混して、心配するごもがらならんか、さもさうづさもあらん。示珠指九の四十六丁の右の初行に、初の中に助給と申意也とは、歸命は即是度我の義也と打出して、一念歸命を度我の義にて解釋する示珠指と、歸命は信順無疑の心也と一途に談ずる寸珍とは、咄のあはぬはづなり。又示珠指の常談に、佛助給は正く歸命の相なりとて、彌陀偈や禮讚にある勝鬘經の此世及後生願佛常攝受のこゝろぞこいへるも、寸珍の常談に、たすけたまへとおもふこゝろ一にて、やすくほこけになるべきなりとも、他力の大信心一にて眞實の報土に入このたまへるご、いつも一のことなれば、二つも三もなき事也といふ、寸珍にはごも

なひ難し、救我度我の願佛心にては、請求祈願のたすけたまへにな
るぞうたてき。

第十五通

信心一章

夫彌陀如來ノ本願トマウスハナニタル機ノ衆生ヲタスケ給ゾ又イカ
ヤウニ彌陀ヲタノミイカヤウニ心ヲモチテタスカルベキヤランマツ
機ヲイヘバ十惡五逆ノ罪人ナリトモ五障三從ノ女人ナリトモサラニ
ソノ罪業ノ深重ニコ、ロチバカクベカラズダ、他力ノ大信心一ニテ
眞實ノ極樂往生ヲトグベキモノナリとは、此一章は他力の大信心一
にてごある御ごこばのあるをあげて、信心一章とせり、これが無
二亦無三の一乗にて、二も三もあるべからずとは、此ごこなり、一
乗は大乗なり、大乘は佛乘なり、二乗三乗あるごこなし、唯是誓願

一佛乘なりごありて、其一佛の誓願より、信は願より生ずればご、
 如來選擇の願心より發起せしめたまひたる真心なるがゆへに、一佛
 一乘の法門にて、其佛心ご凡心ご一になりて、如來のよき心にてた
 すかりぬる、獲得の信樂なることを、今の御一言に他力の大信心一
 ごとて、眞實の極樂往生を遂へきものなりご示めしたまはりたるなり
 信の巻の大信心にて、證大涅槃の眞因極速圓融の白道眞如一實の信
 海なりご嘆じたまへる、他力の大信吉水にて諍論のさき、他力の信
 心は、善惡の凡夫ごもに佛のかたよりたまはれる信心なりご決判あ
 りし、他力廻向の大信心なりご知るべし、然れば二あるべきなく、
 眞實信文類に三心すなはち一心なることを明たまへるに、涅槃の眞
 因は唯信心を以てすご、唯一乘法無二亦無三の唯の字を以て、一

の義を顯したまふ聖覺法印の法語を唯信鈔ご題せられたるも、信行
 兩座の記帳のさき、第一番に出言して、信の座にまひるべしご信不
 退につかれしは、今家吾祖ご御別心なきがゆへに、高祖八十五歳の
 時、眞宗法要の三十一巻のはじめに、安居院法印聖覺作ごある、唯
 信鈔を御註釋あらせられて、唯信鈔文意ご題號を置せられ、一部の
 總標たる其題號を釋したまへるに、唯信鈔トイフハ、唯ハタマコノ
 コトヒトツトイフ、フタツナラゴトナキラフコトバナリ、マタ唯
 ハヒトリトイフコ、ロナリ、信ハウタガフコ、ロナキナリ、スナハ
 ナコレ眞實ノ信心ナリごなされて、それより聖覺の引たまひし、如
 來本願甚分明十方世界普流行の釋文より、彼佛因中立弘誓も極樂無
 爲涅槃界も、信心も一念も、正定聚も不退轉も、聞名憶念自力他力

御文講話

も文意こそくく示めしおはらせられて、コノ文ドモノコ、ロハオモフホドハマウサズヨカラン人ニタヅヌベシ、フカキコハコレニテチシハカリタマフベシ南無阿彌陀佛ごあそばされて、其次の奥書に井ナカノ人々ノ文字ノコ、ロモシラズ、アサマシキ愚癡キハマリナキユヘニ、ヤスクコ、ロエサセントテ、オナジコトヲタビくトリカヘシくカキツケタリ、コ、ロアラン人ハ、オカシクオモフベシアザケリチナスベシ、シカレドモオホカタノソシリチカヘリミズ、ヒトスヂニチロカナルモノヲコ、ロエヤスカラントテシルセルナリ

正嘉元歲丁巳八月十九日

愚禿親鸞八十五歳書之

なされてある、信の一念いまだ稱名の行にのびざるに、業成して唯

御文講話

以信心涅槃の一眞因なる事、祖師一家の宗意におゐて、二つも三つもあるべからず、今章の御一言に、唯他力ノ大信心一ニテ眞實ノ極樂往生ヲトクベキモノナリとあるこそ、出離生死の一道なりと知るべし。歸スルコ、ロノウタガヒナキチ眞實信心トハマウスナリとはすなはち唯信鈔文意の御ことばをうつさせられたるものなり、「信トハウタガフコ、ロノチナキナリ、コレスナハチ眞實ノ信心ナリとある御文なれば、今の御文に「歸する心のうたがひなきとあるは、唯信の一字にあたるこよくく知るべし、南無は歸命と歸するなり、南無といふは衆生が彌陀を信ずる機なりとて、南無は信なり歸なりとして、二なき物なれば、歸命と信心とにも聞持の一念にて、信の一念とも歸命の一念ともたのむ一念ともいふなり、其餘は御文面の

まゝにてよくくきこへさせたまへるなり。

第十六通 白骨之章

夫人間ノ浮生ナル相ヲツラク観スルニオホヨソハカナキモノハコ
ノ世ノ始中終マボロシノゴトクナル一期ナリとは、眞宗法要の第二
十のところに於て出たる存覺上人の六十七歳の御時、文和五年丙申三月
四日にかゝせられたる、存覺法語といふ、聖教によりてつらねたま
ひし、此無常の一通なり、むかしより白骨の御文と稱するがゆへに
今も白骨之章とせしなり。蓮如上人御一代聞書の末の六十八丁の左
に、存覺御辭世の御詠にいはいはく、今は、や一夜の夢となりけり、
往來あまたのかりのやぎく、さては釋迦の化身也、往來娑婆の心
なりと、蓮如上人仰られ候ごあれば、いかにも無常を示めしたまへ

るは、釋迦化身の存覺の法語によりたまへるも、大經のこゝろなる
べし、大經にては上卷には、因願ありて如來淨土の因果なれば、法
藏正覺の彌陀教なり、下卷には成就ありて、衆生往生の因果なれば
迦耶成道の釋迦教なり、かるがゆへに下卷説たまへる言説には、世
人薄俗にして、共に不急の事を諍、尊もなく卑もなく、貧もなく富
もなく、少長男女共に錢財を憂有も無も同然なり、憂思こそ適に等
し、心の爲に走使して安き時あることなし、田あるものは田を憂へ
宅あるものは宅を憂ふ、牛馬六畜奴婢錢財衣食什物復共に之を憂る
に、思を重ね息を累ねて、憂念愁怖せり、横に非常の水火盜賊怨家
債主の爲に、焚漂劫奪せられ、消散磨滅す、憂毒恫々として解る時
あることなし、憤を心中に結て憂惱をはなれず、或は摧碎に坐て身

亡命終ぬれば、之を棄捐して去ぬ、誰も隨者なし、尊貴豪富も亦斯
 患あり、憂懼萬端にして勤苦すること、此の若、貧窮下劣は困乏に
 して常になし、田なければ亦憂て田あらんご欲し、宅なければ亦憂
 て宅あらんご欲す、牛馬六畜奴婢錢財衣食什物亦憂て之あらんご欲
 す、適く一あれば復一を少、是あれば是かけぬ齋等あらんごを
 思、適具あらんごおもへごも便復糜散す、かくの如く憂苦して當復
 求索すれごも、時に得ごあたはず、思想して益なし、身心ごもに
 勞て坐起安からず、壽終身死し獨遠去べし、趣向する所あれごも善
 惡の道能知者なし、世間の人民父子兄弟夫婦家室中外の親屬相敬愛
 して、相憎嫉することなかるべし、有無相通じて貪惜を得ごなし
 言色常に和して相違戻すること莫、或時は心諍て恚怒する所あり、

今世の恨の意微く相憎嫉すれば後世に轉劇く、大怨ご成に至、世間
 の事更相患害す、即時に急に相破べからずごいへごも、然毒を含怒
 を蓄へ、憤を結て精神自然に剋識して、相離ごを得ず、皆まさに
 對生して更相報復すべし、人世間愛欲の中に在て、獨生じ獨死し、
 獨去獨來て行に當て苦樂の地至、趣に身自これに當に代者あるご
 なし、善惡變化して殃福處ごごなり、宿預嚴待して獨趣入すべし、
 遠他所に到ぬれば、能見者なし、善惡自然に行に追て生ずる所なり
 窃々冥々ごして別離すること久長なり、道路同からず會見ごご期な
 し、甚難々々復相値ごごを得や、何衆事を棄て努力精進に善を修し
 度世を願はざらんごこれより、次下の經文紙かず十枚にもあまれ
 るほご、其説相の深切なるご讀誦のたびごごにむねのせまらざり

五帖目
八百九十六
しこごなし、今かきつらねたるも御經の御文をそのまゝ、全くうつし
たるにもあらず、御こごばをはぶきて、きこへやすきところをかき
いだしたれども、尼女房のこもがらのひらかなのつけてあるにたよ
りて、よめるには文字言句のわからぬここのみなるべければ、かき
出して詮なきに似たれども、それは知りつゝ、今かき出せしこゝろを
知るべし、わけはわからぬこごなりとも、大經の中にはかゝる御こ
ごもあるこおもひて、釋迦の御すゝめのおもむきなるやご御大切に
おもひて、讀むうちにはこごろく御受けもできるやうにもなりて
有田くごあるにつけ無田亦有こないにつけ、苦の土苦界のありさ
まをおもひ知らせて、後生こそ一大事ぞ如來の金言にての御化導
今この白骨の御文にて、たれの人もはやく後生の一大事をこゝろに

かけよこの御示めしも、みなく大經の御こゝろすなはち釋迦の發
遣ごて、火の河水の河のうしろより、その道をたづねてゆけごま
らばかならず死せんこの勅命なりご、わからぬまゝにおもひうかへ
るたより、こもがなごおもひけるより御經のまゝの御こごばをかき
いだして、ひらかなをつけをきたるなり、御經讀の折からもうしろ
に居て、話しするくせ、煙草すふくせ、眠るくせ、勿體なしごきの
つく人の一人でも目の覺たらば、たばこの味はひにはまさりたる法
のあじはひも、有難く佛前にての世間はなしもやむこごもあらんか
ご、寸珍者の寸志なりけり。
夫人間ノ浮生ナル相ヲツラク觀スルニ等ごは、存覺法語の十六丁
左ニ、後鳥羽の禪定上皇の遠島の行宮にして、宸襟をいたましめ浮

御文講話

生を觀しまし／＼ける、御くちすさみにつくらせたまひける、無常講の式こそさしあたりたることはり、耳かにてよにあはれにきこへ侍めれこありて、おほよそはかなきものはひこの始中終まぼろしの如くなるは、一期のすぐるほごなり、三界無常なり、いにしへよりいまだ萬歳の人身あることをきかず、一生すぎやすしいまにありてたれか百年の形體をたもつべきや、われやさき人やさき、けふも知らずあすも知らず、おくれさきだつひこは、もこのしづくするのつゆよりもしげしこいへり」こあり。同法語の二十三丁右ニ、「究竟不淨といふは、ふたつのまなこたちまちにこじ、ひこつのいきながくたえぬれば、日かすをふるまゝにそのいろ變じ、次第にあひかはるに九相あり、しかれごもすなはち野外におくりてよはのけ

御文講話

ぶりこなしはてぬるには、九相の轉移をみず、たゞ白骨の相をのみれば、たしかにそのありさまをみぬによりて、おろかなることゝろにおごろかぬなるべし。紅顔そらに變じて桃李のよそほひをうしなひぬれば、たちまちに眸張爛壞のすがたこなり、玄鬢身をはなれて荆棘のなかにまつはれぬれば、烏犬瞰食のこえのみあり」こ、これみな釋迦如來の化身このたまへる存覺上人の法語にて、大經の世事を棄てもつこめよこある佛説を、今の御示めしの「たれの人もはやく後生の一大事をこゝろにかけてこあるに合せて、御教化をかふむるべし。たれの人もは、大經の世人薄俗の佛語にあたり「はやく後生の一大事は、不急の事をあらそふにあたりて、うちかへしての御すゝめなり、上の御經文にてらしあはせて一大事を心にかけてあみ

だ佛を深くたのみまひらせて應當信順、念佛まふすべき如法修行すべし、今より三十七八年のさきなりしが、大阪同行の一人に谷清兵衛といへる信者ありて、態々京都へ人をのぼし我等にたのむことありこの書状をひらくに、ぬす人戸をやぶりて入けるに、ふかく無常を感じたる事のありければ、御經文のこゝろにて無常の一言を示めして、書き與へよこの文言なるゆへ、其のぼりし若きものにたづぬれば、昨夜おどりこみきたりて、主人の一命もあやふかりけるゆへ今朝は御役所への御ごまけの事ども、町用にて家内はごりこみけれども、これを御縁ごして御法座をもうけたく、其ごき床がけにいたしたきゆへ、上京して一筆もらひかへれこの事にて、今朝の晝、船にて上京いたせしごいふをきゝて、取敢ず其ものをまたせをきて、

無常のことはりを書てわたしければ、其夜に持下りて其夜に同行をあつめ、古き表具の一軸に我等のかきし無常のことはをはりつけて手次の寺をまねきて法話にあつかれるに、紺田屋瀧平松屋宅兵衛おぬいおゑいなごいふ人くあつまりてよろこべる、其同行の中に普寂といへる安治川に住居せる書家のきたれるをさいはひに、それを板下にうつし、普く谷清より印施あるに、乞もごむる人のたへせずして、今は其人は往生ありて娘の世になりてありけれども、今にこしくの印施あまたなるよし、諸國に散在して人も知るなれども、家内の凶事を縁ごして法座をもよをさんごて、態人をいそぎのぼらしめて法語を懇望ある其志の淺からざるをおもひいだして、谷清の名をかきのせ板下に筆をごりし普寂も、極信の人なりし名ものこし

無常

「大經の中には顛倒上下無常の根本なり、愛欲榮華常に保へからず皆まさに別離すべしと説玉へり、大論の中には、佛世尊大地を震動せしむるは、衆生に一切無常なる事を知らしめん欲してなり、天地日月須彌大海是皆有常なりと思がゆるに、世尊地を動して無常を知らしむと判じたまへり、經論にも無常の理を教て常住の極樂に入しめんが爲なり、實に人世の無常なる事流水の如、春去秋來日累て月ご成、月積で年ご成年々歳々齡闌、歳々年年々質衰、現世一旦の榮華は富も貴も浮雲の如、日々子より亥に至百年三萬六千日刹那生滅轉變の境なるを、昨日は今日の爲に營、今日は明日の爲に務、朝

の露のはかなくも露は亦置ここあり、人は死して還ここなし、今世受生の思出は、何物をか求ごするや、三界無安猶如火宅の金言骨隨に徹て、またく佛道に入んごすれごも固其器にあらざれば、前世を願に宿命なく、未來を臨に天眼なし、日月は頭上に戴ごも觀念の心は闇なり、山川は足下に踐ても修行の足は折たり、彌陀他力の本願に依ずんば、何の時にか等正覺を成ぜん、努力て迷を翻して建立常然の報土に入へし。

以上

後の世ごきけばごをきにたれごもしらずやけふもその日なるらん何ごごもみないつはりの世の中に死ぬるばかりはまごごなりけりきのふ見し人はごごへばけふはなしあすまたたれか我をごふらん

第十七通

女人後生之章

ソレ一切ノ女人ノ身ハ後生ヲ大事ニオモヒ佛法ヲダフトクオモフ心
 アラバゴハ、示珠指のいふが如く、はじめは後生を大事におもひ、
 つぎには佛法を尊重おもふ、これじつに宿善の機なり、一帖目の多
 屋の坊主達の内方に示めしたまへるには、信心をこり彌陀をたのま
 んごおもひたまはゞ、まづ人間はゆめまぼろしのあいだのここなり
 後生こそまここに永生の樂果なりごおもひこりて、人間は五十年百
 年のうちのたのしみなり、後生こそ大事なりごおもへご示めしたま
 へるにあはせて、後生大事に機がつかねば、安心信心のこり沙汰も
 戲論になりて詮なし、二帖目の多屋内方の章に示めしたまへるが如
 く、女人の身は世路につけ又子孫なんごの事によそへても、たゞ今

生にのみふけりて、これほごにはや目に見へて、あだなる人間界の
 老少不定のさかひご知りながら、たゞいま三途八難にしづまん事を
 ばつゆちりほごも心にかげずして、いたづらにあかしくらすご誠め
 たまへるが如くなるゆへに、わけて女人の章には、この御示めしの
 格のましますここならぬ。ナニノヤウモナク阿彌陀如來ヲフカクダ
 ノミマイラセテより以下は、歸命の一念報恩の稱名、前後の諸章に
 同じ、ヒシハ必至にてこれも他章に同じ。

第十八通

當流聖人之章

當流聖人ノス、メマシマス安心トイフハナニノヤウモナクマヅ我身
 ノアサマシキツミノフカキコトヲバウチステ、モロくノ雜行雜修
 ノユ、ロチサシチキテ一心ニ阿彌陀如來後生タスケタマヘト一念ニ

五帖目
九百六

フカクタノミタマツランモノチバタトヘバ十人八十人百人百人
ナガラミナモラサズタスケタマフベシコレサラニウダガフベカラザ
ルモノナリこは、別して初に、當流聖人のすゝめまします安心とい
ふは、こ標して示めたまへる一章なれば、聞信一念に、機法一體
なる所聞の名號、行者の心想中に印現するすがたを示めたまへる
は治定なり。しかるに示珠指者の解釋は、わづらはしくきこゆるな
り、心中の領解にはあやまりあるべしこもおもはされども、なにこ
か釋體は聞信一念の辨こはきゝりがたし。示珠指九の六十丁の左
ニ、「我身ノ罪ノ深キ事ヲ打捨ルトハ、自身ハ罪障深重ナリト信知
スルハ、即チ其ノ初也、我身ノ罪ノ深キ事ヲ打捨ルハ、其次也、彌
陀ノ御誓ヒニ任セ奉ルハ、又其ノ次也、諸ノ雜行雜修ノ心口ヲ閣ク

トハ、萬善諸行ノ假門ヨリ善本徳本ノ眞門ニ入り、善本徳本ノ眞門
ヨリ選擇ノ願海ニ歸入スルナリ、一心ニ阿彌陀如來後生助ケ給ヘト
一念ニ深ク憑奉ルトハ深信ノ心也、十人八十人百人百人ナガラ、
皆ナ不レ漏助ケ給フベシトハ不捨ノ誓約ナリ、是レ更ニ不可疑者、一
念無疑ノ信心決定スルナリ、箇様ニ能ク意ウル等トハ三ニ結ス。こ
書たり、次ぎ也又次也、願海に歸入するなり等こつらぬるは、天台
別教の斷證に信住行向地等妙の七科を次第して、伏忍位開惠眼開法
眼等をいふが如きのかきかたなり、他人の非をかぞふるにはあらず
れども、雜僧も示珠指は見るならんに、達人の書なりさてわけなく
口まねせんもうたてければ、聞信の一念こいふものは、圓教にては
不縱不横を談じて、世の伊の三點、天主の三目をいふが如く、當流

五帖目 九百八
聖人の勸まします安心にて、我身の罪をうちすつるも、雜行雜修さ
しおくも、たすけたまへたのむをも、みな願海に歸入することに
て、本願成就の名號中に備足し、含具したまへるまゝをあたへたま
へる、至心廻向の當體全是なることを、自信教人すべし、本願訣の
追加に、タスケタマヘトタノムをわければふたつにもわけらる、
初起の一念にかぎること、後々相續へのびゆく物がら二あるやうに
きこゆるよりも、示珠指はのびてきこゆるなり、記事珠は一通を一
貫して、善惡にかゝはらず、一心一向に本願に歸命する相也このみ
かけるは失なし。

第十九通 末代悪人之章

ソレ末代ノ悪人女人タラン輩ハこは、これ大事の標擧なり、能別の

ことばさいふものなり、そのわけは次の文に、イヅレノ法ヲ信ズト
イフトモ後生ノタスカルトイフコトユメクアルベカラズこある御
示めしのまへおきなり、ほかの法は信じても、たすからぬこばかり
いふては、日蓮宗の常談に、諸宗無得道法華獨成佛ごわけもなきこ
ごをいふが如くに、仿ここにきこゆるなり、一天四海比類なき浄土
眞宗の法門、なんぞ念佛無間なごいふて初がねをこめられたり、門
下の俗人まで流罪になるものご、同床並觀すべきものならんや。末
代ノ悪人女人ごあるごきは、上代善人に對するごにて、教ありて
行證なしの末法にて、釋迦の教法まじませご、修すべき有情のなき
ゆへに、さごりうるもの末法に、一人もあらじの佛説、すなはち末
代今の時なるに、無善造惡の凡夫、女人後生成佛の修因あらんや、

御文講話

かるがゆへにはじめに、末代の悪人女人たらんごもがらはご、ゑら
びのここばをおかせられて、彌陀願力には他力廻向の不思議ありて
轉悪成善してたすけたまへるごなれごも、そのほかにはいつれの
法を信すごいふごも、天然の彌勒もなく自然の釋迦もなく、木こり
草かり菜つみ水くみの賤の男賤の女に、初發心時便成正覺の道理あ
らんや、然れば後生のたすかるごいふごご、ゆめくあるへからず
ご道理極成の御示めしなりけり。

第二十通

女人成佛之章

ソレ一切ノ女人タラン身ハごは、わけて女人に示めすごの發端なり
女人往生聞書の中に、存覺上人の示めしたまへるには、「女人はさは
りおもくつみふかし、別してあきらかに女人に約せずば、すなはち

御文講話

うたがひをなすべきゆへに、ごごさらこの願をおこしたまへるなり
これすなはち先徳の料簡なりごあり、これ三十五の願に別して女人
成佛をちかひたまひしを料簡ありし法語なれごも、佛意しかなれば
傳普化の勸章もその寫瓶なるものなり。サルホドニ諸佛ノステタマ
ヘル女人ヲごは、ほかの御文にも、「女人の身は十方三世の諸佛にも
すてられたる身にて候をごも、わが身は女人なればあさましき身に
て、すでに十方の如來も、三世の諸佛にもすてられたる女人なりけ
るをご、あるも同じごごにて、これも女人往生の法語に出してある
心地觀經の佛説に三世諸佛の眼は、大地におちおつるごも、法界の
もろくの女人は、ながく成佛の願なしごあるのたぐひ、記事珠の
引、堅固女經、月上女經、羅索眞言經等のごきを經々にもあまたあ

五帖目 九百十二

るべし、今ひらき見る暇なければ、存じて論ぜざれども、女人成佛のむつかしきことはいふもさらなり。女人成佛トイヘル殊勝ノ願ヲオコシマシマス彌陀ナリとは、これも他章にてはかたじけなくも彌陀如來ひさりかゝる機をすくはんごちかひ給ひて、すでに四十八願をおこし給へりごありて、かさねて三十五の願のこゝろを示させられ、今章にては、阿彌陀如來ヒトリ我タスケズンバ、マタイヅレノ佛ノタスケタマハンゾトオボシメシテ、無上ノ大願ヲオコシテ、我諸佛ニスグレテ女人ヲタスケントテ、五劫ガアヒダ思惟シ永劫ガアヒダ修行シテ、世ニユエタル大願ヲオコシテ」ごあるを識得すべし

第二十一通 經釋明文之章

當流ノ安心トイフハナニノヤウモナクモロノ雜行雜修ノコ、ロ

ナステ、ワガ身ハイカナル罪業フカクトモソレヲ佛ニマカセマイラセテタマハ一心ニ阿彌陀如來ヲ一念ニフカクタノミマイラセテ御タスケサフヲヘトマフサン衆生ヲ十人八十人百人百人ナガラコトクダスケタマフベシ乃至コノコ、ロヲコソ經釋ノ明文エハ一念發起住正定聚トモ平生業成ノ行人トモイフナリとは、慧空の叢林集に、經釋の明文とは、願成就の乃至一念のとき、住不退轉の位なる、是を釋には、信佛の因縁に依て定聚に入云云とせり、曇鸞大師論註解に信佛の因縁を以て、淨土に生ぜん願すれば、佛の願力に乗じて便彼清淨の土に往生を得しむ、佛力住持して即大乘正定聚に入、正定は即阿毘跋致なり」ごあるごころのごとなり、帖外の御文に、龍樹菩薩は即時入必定といひ、曇鸞和尚は一念發起入正定

之聚しじゆと釋しやくしたまへりごありて、聖人しやうじん一流りゆうの章しやうにも、一念發起ねんぱつぎ入正定にふしやうぢやう之聚しじゆごも釋しやくしごあるの類るみ、みな論註ろんちゆうの文もんを取意しゆいしてのたまへるなり其論文そのろんもんの本根ほんこんは、大經だいきやうの聞其名號みやうがうしんくわんぎ信心しんじん歡喜くわんぎ即得そくとく往生わうじやうぢやう住不退轉たいてんの文意もんいなるがゆへに、今の示めしに、經釋きやうしやくの明文めいもんごおほせられたるなり。平生業成へいぜいごふじやうの行人ぎやうじんのごごは、一帖目どうめだい第四通つうに粗かき記しるしけれごも、なを近頃ちかごろ法義はふぎ和爲なかとよ貴いいふ一冊子さつしを開板かいばんして、あまねく世よにひろまれる中に、此名目このみやうもくてんぢ傳持でんぢの事ことごもを審つまびらかにして、法義はふぎ中なかよしの基本きほんごせり、所持しよぢの人は合あはせて見みたまひて、一味いみの和合海わがふかいになりたまはれかし

第二十二通

當流勸化之章

抑當流勸化おぼふたうりゆうくわんけノヲモムキナクハシクシリテ極樂ごくらくニ往生わうじやうセントオモハシトハマヅ他力たうりきノ信心しんじんトイフコトヲ存知ぞんぢスベキナリごは、御本書行ごほんじよぎやう

卷まきの中に、斯行信このぎやうしんに歸命きみやうすれば、攝取せつしゆして不捨故ふてざらけゆへに、阿彌陀あみだご名なく是これを他力たうりきご曰いふごもあり、又他力またたうりきご言いふは如來にょらいの本願力ほんがんりき也なりごもあり、正しやう信偈しんげの、廣由くわうゆ本願力ほんがんりき廻向けうかう、往還わうげん廻向けうかう由他力ゆたうりきこれなり、和讚わさんにては、本願他力ほんがんたうりきヲトキタマヒ、涅槃ねはんノカドニツイラシメン、本願他力ほんがんたうりきヲトキタマヒ、五濁ごじやくノ群生ぐんじやうス、メシム、他力たうりき廣大威德くわいゐとくノ心行しんぎやうイカデカサトヲマシ、他力たうりきノ信水しんすいイリヌレバ、他力たうりきノ信しんトノベタマフ、他力たうりき不ふ思議しぎニイリヌレバ、他力たうりきノ信心しんじんウルヒトヲ、他力たうりきノ信しんヲエンヒトハ如來にょらい二種にしゆノ廻向けうかうヲ十方じふぱうニヒトシクヒロムベシ、他力たうりきノ信しんヲエヌヒトハ、佛智ぶつぢ不思議ふしぎヲウタガヒテ、邊地へんぢ懈慢けいまんニトマルナリごも示しめめさせらる、他力たうりきのごごにて、願力がんりき廻向けうかうの信心しんじんのごごなるがゆへに、信しん心しん淨論じやうろんの師判しはんにも、他力たうりきの信心しんじんは、善惡ぜんあくの凡夫ぼんぷごもに佛ぶつのかたより

たまはるごころの信心なれば、善信房の信心も源空が信心も、ひこしくしてかはる事あるべからず唯一なりご仰のありしも此ごごなり他力ノ信心ヒトツチトルニヨリ極樂ニヤスク往生スベキコトノサラニナニウダガヒモナシごは、此一章の御示めしかたは二帖目の第十四通に同じければさきのにてわかれりご知るべし。浄土へマイルベキ用意ナリごは、記事珠は閲藏の時、見あたり書出せる經文を引事、博識にして、この用意ごいふにも遠き經を引て、用意ごいふは急に臨てせず、かねて心掛るを用意ごいふ、國を治るには亂に先だちて、弓馬を備へ身を養には、病に先だちて灸藥、旅行には雨に先だちて雨具、闇に先だちて燈燭等ごならべたて、後生の一大事に命終に先だちて、信心の用意をすゝめられたり。蓮如上人御一代

御文講話

御文講話

聞書の中の御示めしに、「坊主ハ人ヲサヘ勸化セラレ候ニ、我身ヲ勸化セラレヌハアサマシキコトナリ○ワガ妻子ホド不便ナルコトナシソレヲ勸化セヌハアサマシキコトナリ、宿善ナクバナカラナシ、ワガ身ヲヒトツ勸化セヌモノガアルベキカゴ垂誠あり、みな不用意なるを誨たまはりたる御慈憐也。アナカシコノごは、御開山の御文のごをりになされたるものなり、祖師の御弟子がたへの御文はみなあつめて法要にもある事なれば、ひらきて拜見すべし。御消息集の第一章のはじめに、親鸞聖人御消息ごありて、ナニゴトヨリハ如来ノ御本願ノヒロマラセタマヒテサフラフコト、カヘストメデタクウレシクサフラフごありて、御文のおはりには、一念多念ノアラソヒナンドノヤウニ詮ナキコト論シユトヲノミマフシアハレテサフラ

御文講話

フヅカシ、ヨク／＼ツ、シムベキコトナリ「アナカシヨ／＼二月親鸞ごあり次に六月一日ノ御文クワシクミサフヲヒヌごある御消息のおはりにには、御念佛ヲコ、ロニイレテマフサセタマフベシトオボエサフヲフ「アナカシヨ／＼」。

七月九日性信御坊親鸞ごあり、次に護念坊ノタヨリニ教忍御坊ヨリ錢二百文御コ、ロザシノモノダマハリテサフヲフごある、御文のおはりにには、一念十念モ往生ハヒガコトニアラズトオボシメスベキナリ、「アナカシヨ／＼」十二月二十六日親鸞ごあり、次には、「アナカシヨ／＼」九月二日、念佛人々御中親鸞、「アナカシヨ／＼」九月二日慈信坊御返事親鸞、「アナカシヨ／＼」十一月九日親鸞、「アナカシヨ／＼」十月二十一日唯信御坊親鸞ごありて、いつれの御文もみな／＼「アナ

御文講話

カシヨ／＼にてごめさせられてあり、未燈鈔も同じかなの御文ゆへに、文應元年十一月十八日善信八十八歳ごあるも、「アナカシヨ／＼」ごあり、五説の御文に、閏三月三日親鸞ごある、「穴賢々々ごなされてあり。五月五日教名御坊親鸞ごあるも、「アナカシヨ／＼」ごめに浄信房へも、「アナカシヨ有阿房へも、「アナカシヨ眞佛房へも、「アナカシヨ、十月二十七日も十一月二十四日も、慶信へも隨信へも錢貳百貫の受取も、みなアナカシヨ／＼ごなされてあり、蓮師の御文は一句ごして御私の詞なごは、みな諸註のいふごころにして、御相承のむねを示めしたまへるの外なし、然ればアナカシヨ／＼も、高祖の御假名文のまゝをうつさせられたるものなり、アナカシヨ、穴賢ごもかきけれごも、あら／＼かしくごごむるが如く「あらはづかし

のこゝろにて、アナカシヨ〜ご筆をこめるがやまごぶみのならひ
 ならんかし、下學集には、上古ノ時和漢兩朝末家を知ず、人士の窠
 に居恙虫、人を螫其窠を賢塞を穴賢として、恙なきをこごぶきて、
 本朝書札の往來に、穴賢云也とあれども、それは他の書札のごま
 りには知らず、此御文御消息の御筆ごめには、身のをきごころもな
 くおごりあがるほごにおもふあいだ、よろこびは身にもうれしさが
 あまりぬるこいへるこゝろなり、恙虫の御用心々々にてもあるまじ

聞信の一念、無疑に南無阿彌陀佛の心となりし信心

僧 都 信 曉

七十五歳

附 言

御文五帖一部の中に、當流ごも一流ごも、浄土眞宗ごもあること、
 みな他流をゑらびたまへるにて、其他流の中にては別して、西山鎮
 西の二流、今家に混入して口稱念佛を先とするは、鎮西のまぎれこ
 み、十却信心を談ずるは鎮西のまぎれこみ也、其むね當流の正義に
 あらざるを、教誡の廉〜は、信心を本とし機受を要したまへる
 こと聞思して知へし、其ほか秘事法門の如きは、他流にもてあそぶ
 傳授ごこのまぎれ物なるべし、五重相傳圓頓戒は、一帖目の第五通
 の下に、傳戒佛子何某が持しを寫し出しけれども、其ごころにもれ
 たるを、更に又こゝにも出して海内に知らしむ。

五 帖 目

一 帖 目 十 五 通

二 帖 目 十 五 通

三 帖 目 十 三 通

四 帖 目 十 五 通

五 帖 目 二 十 二 通

總 計 五 帖 一 部 八 十 通 也 以 上

天 保 十 四 癸 卯 年 臘 月 十 三 日

平 安 大 行 寺 愚 主 信 曉

九 百 二 十 二

五 帖 一 部 御 文 講 話 終

大 正 七 年 七 月 五 日 印 刷
大 正 七 年 七 月 十 日 發 行

五 帖 一 部 御 文 講 話 奧 附

不 許 複 製

正 價 金 壹 圓 五 拾 錢

編 輯 者

護 法 館 編 輯 局

右 代 表 者

西 村 九 郎 右 衛 門

發 行 者 兼

西 村 九 郎 右 衛 門

京 都 市 下 珠 數 屋 町 東 洞 院 四 入 橋 町 八 番 戶

發 行 所

京 都 市 下 珠 數 屋 町
東 京 四 五 九 九 七
大 阪 一 〇 二 九 〇 七

護 法 館

寶章研究の要津

御文記事珠

▲理綱院慧琳師著

堀江慶了師著

御冠文註

用合本全一冊 正價金八十八錢

五帖一部の寶章は中祖大師の
慈訓に凡々信念の發露するところ
科句は凡々信念の發露するところ
洵に凡々信念の發露するところ
本は凡々信念の發露するところ
弘く群籍を錯綜し其要を掲げて
拜讀の直に之を冠頭に掲げて
しめ深間の自ら透せしむる如く
按排の深みを徹し其疑を氷釋せし
蒙るれ本校宜が噴々たる好評を

御文明燈鈔

▲淨信院道隱師著

全三冊木版薄用
正價金八貳圓
郵稅錢圓

全三冊木版薄用
正價金壹圓八拾錢
郵稅錢

發行所 京都市下珠數屋町 護法館

寶章研究の最要指針

最新刊 特價提供

龍南大威 山條須力 慈文賀院 影雄秀福 講先道田 師生先義 題序參師 辭文訂著

五帖一部 御文講義

四版六號文活字版全二冊

(製甲) スローク背金文入紙函全二冊

(製乙) 和裝洋紙帙全二冊

特價金壹圓五拾錢(郵稅拾貳錢)

威力院講師の「御文講義」は師の述作中の第一位に置かるべき大著述にして、簡潔明淨の辭を以て殆んど其蘊蓄を披瀝し盡くして餘す處ろ無し、其識見の高きと考證の博き尋常縉流の冗講と其軌を異にし、創見あり、系統あり、苟くも寶章を體得せんとする人々に唯一の鍵鑰たり、宗侶諸氏の一讀を薦む

大行寺信曉師は近世の碩學也

強識博覽其蘊蓄の大なる得て測る可からず一度び講壇に立つや腦底に蓄積する處の無盡藏を開きて縦談横説其精を盡さるなし而かして其説くや懇篤親切言々肺腑より出で、珠玉を聯ね不文の翁媪また爲めに悃誠に動かされて涕泣を禁じ得ざるに至る以て其徳を推すべし次の書に接して之を知れ

誰れ人にも讀み得べき通俗書

●三帖和讃講話

全三冊 活版 正價八拾錢 郵稅八錢
木版和紙十冊 正價三拾錢 郵稅拾貳錢

●御文章講話

五帖 一部 木版和紙五冊 正價五圓 郵稅貳拾錢
全二冊 活版 正價三拾錢 郵稅八錢

●四十八願得聞鈔

全四冊 木版 正價六拾錢 郵稅八錢
活版 全一冊 正價廿五錢 郵稅二錢

●正信偈一言鈔

全四冊 木版 正價六十錢 郵稅八錢
活版 全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢

●佛教百科全書

活版 全三冊 正價八拾錢 郵稅十二錢

讀ば直ちに會得し得る達意講話

325
299

終